

第二十六回「全日本中学生水の作文コンクール」入賞作文集

# 水について考える

主催 国土交通省・都道府県

後援 文部科学省・全日本中学校長会

水の週間実行委員会

独立行政法人 水資源機構



## 「ごあいさつ」

国土交通大臣 北側 一雄

地球上のすべての生命体は、水によって育まれてきました。水は人間や動植物が生きていく上で、欠かすことのできない貴重な資源です。しかし、私たちが利用することのできる水は、地球の表面を覆っている水のほんのわずかな部分に過ぎません。この貴重な水は、太陽エネルギーにより蒸発し、雲に姿を変えた後、雨や雪となって地上に降り注ぎます。そして、地表に降った雨や雪は、地中へ浸透し地下水となったり、あるいは河川の流れとなって、上流から海へと至る循環を繰り返しています。私たちは、循環の過程の中において様々な形で水を利用し、使った水を再び循環系に戻しています。この水の循環を健全な状態に保つことが、今日の私たちにとって極めて重要な課題となっています。

国土交通省は、水的重要性に対する国民の関心が高まり、理解が深まるきっかけとなるよう、昭和五十二年から「水の日」と「水の週間」を定め、様々な行事を行っており、この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和五十四年からこの行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいは両親や先生から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

今年は、第二十六回を迎え、全国（海外を含む）の中学生から過去最多の一六、四八八編（学校数四五二校）もの応募がありました。応募された作文は、日常生活における水の貴重さや大切さを表現したもの、身近な体験から美しく豊かな水を未来に伝えていくために私たちがなすべきことを表現したものなど、水を大切にしていくとする中学生の皆さんの気持ちがよく表現されており、深い感動を覚えました。このたび、入賞作品四十編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校や家庭において「水」について考えるきっかけになるよう願っています。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、また御多忙のところ御審査をいただきました審査委員の先生方に厚く御礼申し上げますとともに、御協力をいただきました都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々に深く感謝を申し上げます、ごあいさつといたします。

平成十六年十月

## 「水の日」及び「水の週間」について

昭和52年5月31日

閣 議 了 解

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

## 「水の日」及び「水の週間」制定の理由

わが国の水の需要は、生活水準の向上、経済の進展等に伴って近年著しく増大してきたが、一方水資源の開発は次第に困難になっており、渇水時には水不足が生ずることが予想される状況となっている。

このような状況にかんがみ、毎年8月1日「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性に対する関心を高め、理解を深めるため諸行事を行うことによってわが国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することとしたい。

なお、諸行事を行うためには、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月上旬が適当であるので、その初日である8月1日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」とするものである。

## 最優秀賞（一編）

（国）土 交通 大臣 賞 「水は大切に」を心に命じて

山形県山形大学教育学部附属中学校三年 植松未知 2

## 優秀賞（四編）

（国）土 交通 省 水資源部長賞 世界から水について考える

島根県広瀬町立布部中学校三年 榎木エンジェライン 4

（全）日 本 中 学 校 長 会 会 長 賞 水のころを大切に

宮崎県須木村立須木中学校二年 杉山真季子 6

（水）の 週 間 実 行 委 員 会 会 長 賞 豊かな暮らし、私の郷里

福井県武生第二中学校坂口分校三年 内山はる菜 8

（独）立 行 政 法 人 水 資 源 機 構 理 事 長 賞 ダムの恩恵

岡山県旭町立旭中学校三年 押目奈々 10

## 入選（三十五編）

北海道厚田村立厚田中学校二年 上山ちづる 12

和歌山県貴志川町立貴志川中学校三年 奥野舞子 30

宮城県鳴子町立鬼首中学校三年 遠藤愛子 13

島根県邑智町立邑智中学校三年 岡先美智子 31

福島県いわき市立小名浜第一中学校三年 増田歩実 14

島根県広瀬町立布部中学校三年 祖田茉沙美 32

茨城県霞ヶ浦町立南中学校三年 稲生歩美 15

広島県近畿大学附属東広島中学校二年 中本夏葵 33

千葉県国府台女子学院中学部三年 中川美和子 16

広島県広島市立早稲田中学校一年 藤原由枝 34

千葉県船橋市立高根中学校二年 中村早央里 17

山口県周南市立岐陽中学校二年 藤村晃成 35

神奈川県藤沢市立湘洋中学校二年 井上茜 18

山口県学校法人高水学園 高水高等学校付属中学校二年 大矢裕香子 36

福井県福井大学地域科学部附属中学校三年 船橋美都 19

香川県庵治町立庵治中学校一年 川田裕香子 37

山梨県駿台甲府中学校二年 大塚美都 20

愛媛県御荘町立御荘中学校三年 中尾優志 38

静岡県不二聖心女子学院中学校三年 佐藤彩香 21

愛媛県今治明徳中学校三年 矢野さおり 39

静岡県不二聖心女子学院中学校一年 白井裕香子 22

福岡県小倉日新館中学校三年 福永尚子 40

愛知県東浦町立西部中学校三年 三浦明日翔 23

熊本県田浦町立田浦中学校三年 鶴田桜子 41

愛知県豊田市立崇化館中学校三年 片山皓平 24

大分県竹田市立祖峰中学校三年 佐藤晋哉 42

三重県皇學館中学校一年 永田晃大 25

鹿児島県十島村立平島中学校諏訪之瀬島分校二年 園山智恵美 43

滋賀県守山市立守山中学校一年 南端理沙 26

鹿児島県西之表市立国上中学校二年 中村美穂 44

大阪府四條畷学園中学校二年 清原光咲 27

沖縄県上野村立上野中学校三年 上田地裕子 45

奈良県川上村立川上中学校三年 田中伶佳 28

インドネシアバンドン日本人学校一年 村田拓斗 46

第二十六回 「全日本中学生水の作文コンクール」 ポスター

第二十六回 「全日本中学生水の作文コンクール」 概要

第二十六回 「全日本中学生水の作文コンクール」 地方審査優秀者名簿

第二十六回 「全日本中学生水の作文コンクール」 応募状況

第二十六回 「全日本中学生水の作文コンクール」 応募状況の推移

第二十六回 「全日本中学生水の作文コンクール」 表彰式



最優秀賞（国土交通大臣賞）

「水は大切に」を心に命じて」

「集中しろ。」

コーチの声が飛ぶ。坂道でのローラースケート。気持ちが緩めば、バランスが崩れる。スピードが出ている。危ない!! 集中力が途切れるのは、喉が渴いている時だ。四百mを滑り抜け、ゴール。汗が噴き出し、喉がひりひりする。水を一口飲む。ほてった喉に、胸に、水がしみこんでいくのがわかる。暑い日差しの中で、ほっとする瞬間だ。練習に水筒は欠かせない。百分の一秒を争うアルペンスキーの練習で、水は私にとって必需品だ。雪のない夏の炎天下、私は坂をひたすら登り、滑る。

冬。待ち望んだ雪が降る。手のひらで受けた雪がとける。水になるその瞬間が好きだ。

「なんでスキーが滑るか、わかるか？」

摩擦でとけた雪が滑走面を流れるからだ。水の力を借りて滑れとコー



山形県 山形大学教育学部附属中学校

三年 植松未知

チの言葉が響く。

いよいよ本番。スタート地点で滑走面の手入れをしながら順番を待つ。唇が乾く。喉が渴く。不安と緊張が混ざり合いながら、体の中で渦を巻き、水分を奪っていく。目をつぶり、コースを思い浮かべながら、スタートに備える。あそこはああして、ここはこうして……。ますます喉が渴き、不快感が高まっていつて落ち着かない。そんな時、私は雪に埋めておいたペットボトルを取り出し、水を一口飲む。雪温でキンキンに冷えた水が喉を通り、胃に入り、全身にしみ渡る。その瞬間が格別に気持ちがいい。冷たさに心が落ち着く。

夏の水。冬の水。私はスキーを通して、一滴の水の大切さを味わっている気がする。

蛇口をひねると勢いよく流れる水。川のせせらぎも気持ちがいい。流れる水は私には心安らぐ普通の風景だ。去年の夏、白神山地に行っ

た時も、「川の通信簿」で最上川を調べた時も、透き通った水がとてきれいだった。きれいな水と水を守る人々に私は安心した。いつまでも大事にしたいその風景を楽しんだ。

ところが、それは普通ではなかったのだ。ホームステイをしたタイで見たチャオプラヤ川は大きな緑色の川だった。水は動かず、独特のバクテリアの匂いとごみ。ミネラルウォーターがそこでは普通だった。五百mlで約四十五円。水道の水で顔は洗ったが、歯磨きはできない。水に値段があるなんて。驚く私にホストマザーは水の注意を繰り返す。

「ミチ、この水はオーケーよ。」

水への関心が高く、水は貴重品だ。山がないタイでは雨はすぐ海に流れてしまう。

帰国して、手を洗う。透き通った水が勢いよく流れる。流れる水は冷たく、爽やかな気持ちになる。水が指先からしみ込んでいく。日本の豊かな自然が生み、たくさんの人々が支えているこの光景を今までごく普通と感じていた私。改めて考え直さなければと思った。

地球は「水の惑星」といわれ、命の起源は水の存在に関係するそう。人間の体の七十%は水分だというから驚かされる。水が豊富な地球でも、使える水は水全体のほんのわずかだ。安全に水が飲め、安全に使える日本は、命の水に囲まれているといってもいいだろう。だか

らこそ、限られた水を大切に使わなければならない。夏の一滴の水が私の喉の渇きを癒し、冬の一滴の水が落ち着きをくれたことを思い出しながら、私達みんなで命の水を守る方法を考えていかなければと思う。恵まれた日本の環境に感謝し、一滴の水を大切にすること、山の緑が水を育てること、水を蓄えること。水を大切にすることを常識にしていきたい。水は地球上のみんなの宝物だもの。

今は五月。まだ月山ではスキーができる。雪がダムとなり、水を蓄えている。とけだした水で、ブナの木が柔らかな緑色に光っている。こんな景色を見たら、タイのホストファミリーはどんなに驚くだろう？水道の水を見たら？そう思いながら、慌てて水道の蛇口を閉めた。「水は大切に」を心に命じて。

優秀賞（国土交通省水資源部長賞）

「世界から水について考える」

私は、九歳までフィリピンに住んでいました。フィリピンでは、水道設備が完全に整っておらず、私の住んでいたところは首都マニラではありませんが、やはり水道はありませんでした。各家毎にタンクを設置し、給水車で水を補充していました。もちろんその費用は全て、各家庭で負担しなければなりません。洗濯、お風呂、お皿を洗う時など、自分の家にある大型タンクの水を使います。大家族で生活するので、気付かないうちにタンクの中の水が空になったり、どこからこんなものが入るんだろうと思うようなものでパイプがつまったりと、タンク関係のトラブルが週に二、三回は起こっていました。

もちろん水をそのまま飲むことはできません。たいていの家庭は、水を沸騰させてから飲むのですが、私が住んでいた家はタンクも古くさびていたので、どうしてもその水をそのまま飲用に使えず、二週間に一回、ミネラルウォーターの二十リットルのタンクを五つぐらい



島根県 広瀬町立布部中学校

三年 榎木 エンジェライン

買って使っていました。御飯を炊く時もミネラルウォーターで炊いていましたし、料理を作る時もミネラルウォーターを使っていました。私は、そういうことが普通であたりまえなのだと思いますし、水は貴重なものだ、まさに体で実感していたのです。

日本に来てびっくりしたのは、一般の家にタンクが無いことです。そして水道水を飲んでいることにも驚きました。日本では、水道の水でお皿を洗うこともできるし、お料理にだって水道の水を使ってできるのです。それにいくら水道水でお皿を洗ったり、洗濯をしたり、シャワーを使っても、水道の蛇口をひねれば、途切れることなく水が出てきます。

また、日本の喫茶店に入るだけで、何も言わなくても、コップ一杯の水が無料で出されます。フィリピンではその水さえも買わなければならなかったのです。日本人の水に対する感覚にずいぶんとまどいを感じ

じたものです。

今私が住んでいる島根県の西谷地区では、山水というのがあってそれを飲む人がいます。道端に山水が流れていて誰でも自由にそれを飲むことができます。

水はミネラルウォーターを買って飲むという習慣だった私にとって、この習慣は最初とても抵抗がありました。最初は、本当に水を沸かさなくても飲めるのだろうかと心配していました。おそろおそろ実際に飲んでみて、本当にキレイな水だと分かり、ホッとしました。でもやはりしばらくの間は水道水や山水をそのまま飲むことには勇気がいりました。

そんな私も今では蛇口をひねれば途切れることなく水が出てくる生活に慣れてしまいました。水はいくらでもあるものと思い込んでいたように思います。日本に来てからの自分の生活を振り返ってみると、ずいぶん水の無駄使いをしていることに気付きます。例えば、お皿を洗うときは水を出しっぱなしで洗っていますが、フィリピンにいたころではけっしてありえない話です。なぜならば、水を使いすぎれば、その分の水を自分達で補充しなければならないからです。

フィリピンの、それもマニラでも市街から外れたところでは、地域にある共同の井戸まで、タンクを両手にもち、水を汲みにいかないといけない場所がまだあります。この水運びはフィリピンでは、子供が

すべき当然のお手伝いでしたので、私も幼い時には、よく手伝いました。その時の水の重さ、家までの道程のつらさは忘れられません。

それを思えば今の私の生活はとても水に恵まれています。だからといって水を無駄に使って良いわけではありません。今までの生活を振り返り、自分の生活を反省したいです。そして、世界のみんなで未来を考え、水を無駄にしないようにしていきたいと思います。

優秀賞（全日本中学校長会会長賞）

「水のこころを大切に」

水はつかめません

水はすくうのです

そおっと 大切に・・・

学校で習った高田敏子さんの詩が思い浮かんだのは、ある寒さの厳しい朝のことでした。

私は、人口二千五百人余りの須木村で生まれ育ちました。美しい自然に囲まれ、栗や米、木材等の第一次産業の盛んな村です。そんな村のライフラインともいえるのが、学校のすぐ横を流れる綾南川です。清流として知られ綾町を横切り宮崎市に流れています。私の村は、生活のための水もお米を育てる水もすべてこの川を頼っています。

そんな村に起こった大事件。それが、今年三月に起きた村浄水場のポンプの破裂です。厳しい寒さでポンプが破裂し、朝から村内すべての水が出なくなりました。



宮崎県 須木村立須木中学校

二年 杉 真季子

困ったことが、次々に起こりました。飲み水がないのです。朝食を作ろうにも水が出てきません。歯も磨けなければ、顔も洗えません。中でも一番困ったことはトイレです。トイレに流す水がないのです。学校に行くと、川からトイレ用に先生たちが水をくんでくれました。役場の方が飲み水用の水を運んでくれました。

水が使える！

このときほど水のありがたさを感じたことはありませんでした。今まで当たり前のように感じていたことが、本当にありがたく思えました。

その日の給食は、水が使えないためにパン三枚とジャムと牛乳でした。

「嫌だ。」

「何、これ。」

文句を言う声があがりました。私もこんな給食は嫌だと思っていた。  
した。

ふと窓の外を見ると、私のよく知っている役場の方たちがトラックに乗っていました。よく見ると、水のタンクが積んであります。トラックに乗って、忙しそうに走り回っています。きっと村内の各家々に、学校に、老人ホームに水を届けていたのだと思います。

私は、自分が恥ずかしくなりました。私たちに飲料水やトイレの水を運ぶために、こんなに苦勞している人がいるのに、私たちは何も知らずに給食が少ないと文句を言っている。水が出るのが当たり前の時には感謝の気持ちもなく、水がなくなると不満しか言わない。私は、水の大切さも、水に携わる人の心も考えていませんでした。

私は、水がなくなつて初めて水の大切さを感じました。それ以上に、水に携わる人の心を感じました。毎日当たり前のように飲んでい  
る水の裏側に人の心があるのだということを実感しました。

私は、このことを周囲の友達に話してみました。初めは不思議そうに聞いていた友達も、今では水の出ているのを見ると「止めない  
ね。」と言って水道栓を閉めています。私の話を聞いた母も「節水。節水。」と言って家庭でも水の無駄使いはしません。ちよつとうれしくな  
ります。

水が大切なことは誰でも知っています。家でも学校でも教えてくれ

ます。しかし、水の裏側に人がいることは気づかないものなのかもしれ  
ません。私は、水の裏側に人の心があることを一人でも多くの人に  
伝えていきたいと思います。それが、未来の地球を守る一歩につなが  
るような気がするのです。高田さんの詩が、それを私に教えてくれま  
した。

水は　つかめません

水は　つつむのです

二つの手の中に

そおつと大切に

水の　こころも

人の　こころも



優秀賞（水の週間実行委員会会長賞）

「豊かな暮らし、私の郷里」



福井県 武生第二中学校坂口分校  
三年 内山 はる菜

「川にも表情がある。」この言葉を初めて耳にしたのは去年の秋でした。全国の水について興味・関心をもつ中高生が広島に集まって、水について話し合う機会がありました。そのときに聞いた言葉です。表情とは笑ったり、泣いたり、怒ったりといった人間特有のもので、ただ流れるだけの川のどこにどんな表情があるのか不思議でした。しかし、私が川にも表情があるということを初めて実感したのが、今年のゴールデンウィークでした。

今年的大型連休に大阪に行ったときのことです。たくさんの近代的な建物が並び、華やかな人々が行き交う大阪は田舎者の私には驚きでした。しかしもう一つ驚いたのは、にぎやかな街に沿って流れる川です。街とはうらはらに、たくさんのゴミが浮いている暗くて深い色をした川。それを見ると、とても悲しくなりました。川が泣いている。そう思いました。

そして次の日、田舎に帰ってきた私は、父と一緒に苗箱を家の裏の川で洗いました。小さいときには、ツルンとすべって水びたしになった記憶があります。そのことを父に話したら、

「それは石に生えた藻ですべったんだろう。」

と言いました。しかし川の中を見ても石に藻が生えている様子は見られません。

「お父さん、藻なんか生えてないよ。」

と私が言うと、父は

「きつと今は下水処理場がこの町内にできたから、川の水がきれいになって、石に藻が生えなくなったんだよ。」

と言いました。私の父は、町内の下水処理場を管理しているので、いろいろ話してくれました。大昔、家庭から出る生活排水は下水処理場を通さずに川に流していました。なぜなら家庭から出る生活排水も少

なく、自然が浄化できる範囲だったからです。今は台所で合成洗剤を使うけれど、昔は灰汁を使っていたそうだし、お風呂でも今は様々な洗剤を使いますが昔は水のみで洗っていたと聞きました。トイレの便や尿も有機肥料として使われ、自然の中で循環していました。しかし、洗剤や洗剤など生活排水が増え、そのまま川に流すことが難しくなったので、一つの家に個別の浄化槽がとりつけられるようになりました。個別の浄化槽とは、トイレにつながっていて、便や尿を無数のバクテリアによって分解する仕組みになっています。しかし、個別の浄化槽では人の便や尿に含まれているりんを浄化する能力が低くて臭いが少し残ってしまったり、りんは藻を繁殖させるはたらきがあるので川がヌルヌルしたりしてしまいます。そこで私の町内は下水処理場を四年前から設けています。下水処理場は個別の浄化槽に比べて完全にきれいな水にすることができます。しかし、町内では下水処理場に反対する人々もいました。なぜなら年金暮らしのお年寄りへの受益負担が大きいからです。父は、下水処理場設置において人々の理解を得ることが一番難しかったと言っていました。しかし今、十七世帯の全員が納得した上で、下水を浄水にして川を汚さない努力をしています。こうやって私の町内の川も少しずつきれいな川になってきたのです。苗箱を洗いながら足の感触を通して感じました。

ごみだらけで悲鳴をあげている大阪の川、下水処理場によって美し

くなった笑顔の川。今、地球上に存在する川の中で笑った川を見ることはなかなか難しくなってきました。しかし、私の町内のように浄化システムを取りつけたり、排水の量を減らす工夫をしたりするなど笑顔の川をとり戻そうとする計画は様々な所で行われています。

私はこの郷里が大好きです。そんな背景には清らかな川が流れています。人々と川が支え合い笑い合う。そんな生活が本当の豊かな暮らしと言えるのではないのでしょうか。



優秀賞（独立行政法人水資源機構理事長賞）

「ダム之恩恵」

水はとても大切です。人間が生きて行く上で水は欠かせません。昔から人々は水の流れる所に集落を築き、ともに暮らしてきました。しかし、自然な状況での水を確保することは大変なことでした。日照りなどによる水不足、寒さによる凍結や長雨による水害。その度に人々は困り、悩み続けてきました。そこで、人々はある考えに辿り着きました。ダム建設です。その結果、水不足や洪水などの水害の悩みは解決できました。しかし、それにより水没してしまう村ができました。その村の人々は、住みなれた土地、祖先から受けついだ土地を捨てて、出ていかなければなりません。ダムは、天災から逃れられる多くの人々の喜びと、そのために私たちのかなければならない多くの人々の涙とともに造られているのです。

我が町、旭町もかつてダム建設により犠牲になった村でした。家や道、田畑や野山などの思い出の場所は、全てダムの底深くに沈んでし



岡山県 旭町立旭中学校

三年 押目 奈々

まいりました。多くの若い人は、それにより村から出ていきました。残った者は多くの年寄りと少数の若い人や子どもだけだったそうです。そこから旭町の過疎化が始まったと祖父や近所の方は説明してくれました。また、ダム建設で良かったことはあまり無い。悪いことばかりだ。人口は減少するし、新しい土地は住みなれない。田畑はこれから作り直して大変だったとも言っていました。こうして実際に話を聞いてみると、ダム建設はあまり良いことばかりではないんだなと思いました。私は、ダム建設をしたほうが良かったのか、それともしなかったほうが良かったのかわからなくなりました。

私は、今度は祖母にダム建設をやって良かったことはあるか聞きしました。すると、たくさんあるよと話をしてくれました。水没する前の村の川幅は、狭く浅かったそうです。一度台風が来ると、川は増水して水が溢れてしまいます。そのため、家々は水没して大変だったそう

です。そう考えると、ダムができたことにより洪水による心配が無くなったので良かったなと思いました。また、日本の川は急なので、川水はすぐ海に流れ出てしまいます。ですが、ダムなどで水を留めておけばすぐには海へ流れ出てしません。それに、日照りが続き、川の水が枯れてしまったとしても、ダムがあれば多少の日照りには持ちこたえます。新しい町のシンボルにもなります。以上のことから考えると、ダム建設をして良かったなと思いました。

ダム建設が「良い」「悪い」の判断は、とても難しいです。なぜなら、『まち』にはたくさんの方がいます。その人達全員が納得できる結果となるのは、無理に等しいほど大変だからです。人が一人一人違う様に、『まち』も一つ一つ違います。その『まち』一つ一つにとって、善か否かはその『まち』の人々の受けとめ方だと思います。現に、祖父や近所の方と祖母の考えが違う様に・・・。

私が生まれた時には、ダムはもうすでにそこにあたり前にありました。だから、天災や水害で明日の生活が困ってしまう経験はありません。事実、雨量が少ない時期にTVで給水制限などをしている地域がありました。ですが、私の町ではその様なことは特にしなくても大丈夫でした。私達、現代の人々はめぐまれていたのです。水害に悩まされることも、ダム建設の問題に巻きこまれることもありませんでした。思えば、今、水に困らないゆたかなくらしがダムのおかげであ

り前に、自然に約束されていたのです。

祖父母の時代の人々が体験した大変な時期。そして、今。ダムという大きなため池で水は守られ、調整されしっかりとその目的と役割をはたしていると思います。今、ここに幸せなくらしが約束されているのは、ダムのおかげだということ。この事を忘れずに、水を大切にしてくらしていきたいと思います。

## 入 選

### 「厚田の水は苦労の結晶」

北海道 厚田村立厚田中学校

二年 上 山 ちづる

昔、にしん漁で栄えていた頃、私の住んでいる厚田村安瀬地区は、まだ住宅がたぐさんありました。それが今では、わずか十一軒。とても寂しい感じはしますが、私の家からは、緑がいつばいの山と、大海原をいつべんに臨むことができる、とても豊かな自然に恵まれている所です。そんな自然に恵まれた安瀬地区には幌内川という川が流れています。そこにはこんなアイヌの伝説があります。「妻に先に死なれた夫が子供に幌内川の水を飲ませたらすくすく育った」というものです。この幌内川は、現在、厚田村簡易水道の水源となっています。この水道が私の家に引かれたのは何と平成六年、私が四才の時でした。

私が四才の時に、水道がとどいたということは、私の生まれた頃は当然、引かれていませんでした。とりあえず蛇口をひねれば水は出てくるという状態ではあったようです。ただし、それは、山に貯めてあった貯水池の水でした。私はもちろん記憶はありませんが、母がその頃の話聞かせてくれました。

「天氣の良い日は、きれいな水が出たけれど、雨が降った日は、どろ水がすくくて、白い物を洗濯すれば茶色になって、とてもじゃないけれど、飲めなかった。おまけに、夏の暑い日は、貯水池の水が涸れてしまった。そして、年に何回か安瀬の人たちで、山に登って貯水池の掃除をしに行っていた。」ということでした。その話を聞いた時、そういえば私も三才か四才の時に、山を登ったことがあるということ思い出しました。

その頃の私は、なぜ山登りをしているのかもわからずに、父や兄のあとを追いかけて、母に背を押されながら、ただがむしやりに登っていました。今思うと、「なんで安瀬の人たちだけがこんなに苦労していたのだろうか。他の村の人たちは、何もしないで水を手に入れていたのだろうか。」と勝手にそんな思いが浮かんできました。

しかし、それは大きな誤りでした。私たちの村では村に残る貴重な話をこれらの世代の人々に残したいという気持ちから作られた「あつた百話」という本があります。その中に、村が生活用水に悩まされたことや、水道が引かれるまでのことが書かれていたのです。

そこには、次のようなことが書かれていました。厚田村の別の地区は、高台にあるため、水不足だったり、簡易水道があっても、夏の渇水時には給水が制限されたり、近くに川があったが、ドロのため飲み水としては、使えなかったり、井戸があっても人々の生活用水は大きな川だったりして、水には本当に悩まされたそうです。そして昭和三十年ころからは、米をもっと作ろうと、田んぼが作られました。しかし、それが原因で、水田から流れ出た農薬が川を汚染し、村で一番大きな、厚田川は、生活用水としてはふさわしくないものになってしまいました。そこで現在の幌内川を水源としたのですが、厚田村簡易水道ができたのが昭和三十六年、村内の全地区まで引かれたのが昭和六十三年だったということです。から、私の住んでいる安瀬地区だけでなく村の人々は皆、とても水で苦労していたのだということを私は初めて知りました。

母は、「今の水もおいしいけれど、貯水池の水の方が薬のにおいがなくておいしかった。」と言っています。けれども私は、今の水道水の方がいいなと思います。それは水道の方が楽とか、きれいだからということではなく、昔の村の人たちの苦労の結晶のように思えてきたからです。これからは、この苦労の結晶に感謝の気持ちをもって、ゆつくり、味わおうと思います。

## 「水との絆」

宮城県 鳴子町立鬼首中学校  
三年 遠藤 愛子

我が家は、水道水とは無縁だ。日々の生活用水の一切は、自然の恵みに預かっている。四方を山に囲まれ、その斜面からは年中コポコポと湧き水が流れる。そばに真つ白く咲く水芭蕉の群れは、今年も春が来た事を教えてくれた。私はいつも、水と手をつないでいた様なものだった。

「水芭蕉の咲いてるところの水飲めよ、うんときれいだから。どうだー、いいだろ。水道まで行かなくていいんだぞ。」

よく幼い頃、父の田植えを見ていて、喉が乾わくと、そう言ってフキの葉をおつてくれた。これをくると丸めて、脇を流れる水をすくって飲む。キーンと冷えていて、飲んだ後、ほんのりとやさしい甘さが舌に広がった。

また、田んぼの側溝さえも小川のように見えて、思わず手足を突っ込んだ。なぜか、水と一体になったかかったのだ。キラキラと日の光を受けて、水底のどじょうが動く様子がくつきりと見え、いつまでも飽きなかった。

今思えば、それは、山から田へ水を引き、稲を育てる、大切な水だった事に気付く。

よく祖父達は、「水こそ俺らの命」と幼い私に語ってくれた。山からの水で米を作り、育てたスイカなどを冷やしたり、野菜を洗ったり、泥や汗を流した、実際の経験を肌で感じてきた言葉だと思う。

しかし、世界では、誰しもがきれいな水を大量に、自由に使えるわけではない。

『カンボジアに心の井戸を』というノンフィクションがある。子供達は、続いた内戦のため、いつ毒を入れられるか分からない恐怖から井戸も作れず、今も小さな泥の水のたまりや、堀の中からくんで水を飲み、魚を洗う。それは、あらゆる病の原因となり、乳幼児千人中、百五十人もの命を奪う。これは、日本の死亡率五人と比べると莫大な人数だ。それを見かねた一人の日本の僧の方が、自らその地へおもむき、募金で集めた費用で何十もの井戸を作るのだ。

「うわーっ、水だ!」

渇水による死の恐怖。どれほど本物の水と無縁だったのか、どんなに水のない生活が苦しいものなのか。大声をあげてはしゃぐ少年達の笑顔が、それを物語っていた。

私は、水と命がかかわりあう一線に立った経験がないせいだろうか。ともすると、水の存在を当り前の事として、その恵みに甘えている自分に気付かされた。

速さ、便利さ、美しさを追求するあまり、その代償として、水が犠牲になっている現代。地球規模で資源について考え、「このままではいけない」ことは、誰もが知っている。そこに関わる地球人の一人として、あえて私自身、何が出来るだろうか。

常に使うシャワーやトイレの節水はもちろん、ダムの上流地域に住む立場の私は、ことに、洗剤や油など、汚水を少なくしなければならぬ。スーパーで買う野菜も形が不揃い、土がついていて当然なのだ。そうすれば農薬の量も減る。自然の恵みも非も素直に受け入れ、それに沿って生きる勇気が必要だと思う。

また、これ以上蛍が川から消えない様に、めだかやかじかがまだまだ見られる様に。そんな小さな理由をあげると、水を思う気持ちが必要になってくる。

いつか、私達が死の恐怖に直面した頃、皆で水の保護に立ち上がっても遅い。その前に森林や動物達が苦しむ姿も見たくはない。

私達の体のほとんどが水であるように、遥か太古の昔から、水と私達は一体なのだ。身近であることは同時に、かけがえのないもの同士であることだと思う。この絆を自らの手で知らず断ち切ってしまう事のないように。一人一人の水に対する小さな願いや希望、そして期待が行動となって、水を守る歯車を回さなければいけないギリギリの地点に、私達はいるのではないだろうか。

## 「水」のない生活」

福島県 いわき市立小名浜第一中学校  
三年 増田 歩 実

私たちがいつも顔を洗ったりお皿を洗ったり、何気なく使っている水ですが、皆さんはその水の大切さについて考えたことはありませんか。水をかけがえのないものとして、そのありがたみを感じたことはありますか。

私が中学校に入学して間もない頃、学校の水が一切使えなくなったことがあります。はつきりした原因はわかりませんが、学校の屋上に水をくみ上げるポンプが、何らかの要因で故障してしまったようでした。

水が使えないことを知った時、初めは大して重要なことだとは思いませんでした。断水しても、そのうち水が出るようになるだろうと簡単に考えていました。しかし、一時間たっても水は出ません。二時間たっても水は出ません。そのうちに、トイレにも行きたくなります。でも、その時も水は出ないのです。少し焦りを感じながら、全校生徒六百名以上が不安な時間を過ごしました。春の暖かい日はのども渴きます。でも、水を飲みたくても飲む水がないのです。先生方の配慮で、トイレを流す水だけは、プールからバケツで水をくみ出し、各学年の廊下に大量に置かれました。普段何気なく流していたトイレに水が出ないことが、こんなにも大変なことだということをその時初めて感じました。

水がないと思うと余計にのども渴くような気がして、男子の中には、「水飲みてー」と叫び出す生徒さえいました。給食の時間が近づいても依然として水は全く出ない状況で、学校から市に連絡して、学校に給水車がやってきました。新しいバケツに真新しいビニールの袋を入れ、そこになみなみと水が注がれました。のどの渴きを押さえきれない私たちは、各学年に配当された本当に限りあるバケツの前に、まるで配給を受ける人のように順序よく並び、たった一杯の水を飲むことができたのです。その時飲んだ水は、普段なら決して感じるこのできないほどおいしく、思わず涙が流れそうになったことを今でも覚えています。

その後もしばらく水が出ない時間は続き、一日の授業が終わった頃、やっと水道から水が流れる音を聞くことができました。その時のみんなの嬉しそうな顔。「水だ、水だ。」と叫びながら蛇口から幸せそうに水を飲む姿。なんだかほっとして、水のある生活のありがたさがわかったような気がしました。

この体験を通して、私は自分自身の生活を見直す機会を得たように思います。蛇口をひねればいくらかでも出てくると思っていた水が、こんなにも貴重で大切なものだったことを実感したのです。そして改めて、水は限りある資源であることを思い出しました。それからというもの、私は、シャンプーの時、今まで出っぱなしだったシャワーを、すすぐ時だけ流すようにしました。歯磨きの時も、コップに水をくんで歯を磨くようにしました。時折出っぱなしになっている学校の水道を、気がついた時には閉めるように心がけています。ほんの些細なことかもしれないけれど、なぜかそうすることが、とても大切なことであるように思えるのです。そして、世界中の人々が水を大切にしている気持ちを持つならば、この世界はもっともっとすばらしい世の中になるような気がします。

外国では、調理用や飲むための水は、スーパーで買っていると聞いたことがあります。喫茶店やレストランでも水は注文しないと出てこない国がたくさんあるそうです。それに比べて私たち日本人は、蛇口をひねれば飲める水が出てきて、そのありがたさや大切さを見失いかけているのではないのでしょうか。水に恵まれている国だからこそ、水の大切さを忘れてはいけないのだと思います。皆さん、水を大切にしてください。顔を洗う時、うがいをしている時……。これは、私とあなたとの約束です。



## 「大切な水を守る」

茨城県 霞ヶ浦町立南中学校  
三年 稲生 歩 美

私達人間にとって水は、生活には必要なものである。食事をするにも、洗濯するにも、入浴するにも…と、生活する中で様々なことに使っている。また、それ以前に人間を含めて生物すべてが生きるうえで、なくてはならないものである。

しかし、今、その水に大きな問題が起きている。私の家では姉が生まれた頃まで井戸水を使っていた。ところが、姉の使う哺乳瓶を消毒していた母が、哺乳瓶についた白い粉を見つけ、検査をしたところ飲み水にふさわしくないことが分かった。そのため、それからは上水道を利用することになったのだ。どうしても飲み水にふさわしくないのか不思議に思い、父に聞いてみた。すると、畑にまいた肥料が地下にしみ込み、水を汚染していて、乳幼児が飲むとチアノーゼになるということであった。それまで安心して飲んでいた井戸水が飲めなくなることは、とても怖いことであり、汚染の原因も人間がかかわっていることにも驚かされた。

さらに、私の心の中に大きな不安が膨らんだ。それは、今飲んでいる水は、安心なのかということだ。

霞ヶ浦町の上水道は、地下水に那珂川の水を取り入れている。しかし、この周辺のほとんどの市町村は、霞ヶ浦の水を供給源としている。夏、霞ヶ浦に行くと鼻をつまみたくなるほどくさい水を飲んでることを初めて知ったときは、とても信じられなかった。そして、その汚れの大きな原因は、私達の生活排水であることも分かった。

そこで、何とか霞ヶ浦の汚れを防ぐことはできないかと考え、私は小学校三年の時から自由研究に取り組んできた。

まず最初の四年間は、水をできるだけ汚さないための洗濯の仕方について調べてみた。

その結果、合成洗剤を使わなくても汚れを落とす方法を見つけたことができた。

合成洗剤を使うことだけに頼らずにしみを落とす工夫をし、合成洗剤を減らしていけば少しでも水質汚染を防ぐことができるのではないかと考えた。

次の二年間では、水質浄化について取り組んだ。水草の光合成による水質浄化や石・砂・活性炭を使った自然ろ過装置を使った水質浄化ではどちらも同じくらい水をきれいにすることがわかった。このことから、霞ヶ浦や流域の川に水生植物を増やしたり、川底に小石や炭を敷くことで、川をきれいにすることができると考えた。

さらに、洗濯の研究で効果のあったEM活性液を水質浄化に使うことはできないかと考え、研究をした結果、酸性に変わることが分かった。このことから、EM菌を家庭排水と一緒に流せば川や湖の水生植物や植物性プランクトンが育つ環境に恵まれ、酸素が多く作られるようになるのではないだろうか。

私達は忙しい生活の中で、どうしても簡単に済ませてしまうことを求めているがちだが、一人一人が出来る小さな取り組みをすることで、私達にとって大切な水を守ることが出来ると思う。

霞ヶ浦にアサザを植えるという活動や自分達で炭を焼いて川底に敷く活動に取り組んでいるという話を聞いたことがある。

このように、水を汚さない工夫をすると共に水生植物などによる自然浄化が出来る環境を整えていくことによって、水をきれいにしていくことが出来るだろう。

私達人間は、便利さを求めて歩んで来たが、その結果、公害や水質汚染を招くことになった。人間の手で少しずつ水を汚してしまっただから、これから私達がすべきことは、少しずつ水をきれいにするための努力をしていくことだ。

自分達に何が出来るかを考え、皆で協力し合って、大切な水を守っていききたいと思う。

## 「地域と水の用途」

千葉県 国府台女子学院中学部

三年 中 川 美和子

四月も半ばを過ぎ、色取り取りの花が咲き誇る頃、近くの田んぼには、たっぷりと水が張られます。太陽の光が反射してきらきら光る田んぼは、苗が植えられた新緑の風景とはひと味違った輝きを放っています。私は小学生の時、「実習田」を通して二年というわずかな期間でしたが、米作りに携わったことがあります。苗床に種まきをしてから、芝のような苗がのびて来るまで約一週間。その日から田植えまでは、ほんのり暖かいハウスの中で水やりをします。愛着の湧いて来た苗を田植えした後は、田に沿って作られた用水路から水を引く作業に移ります。米作りに「水」は、一日たりとて欠かすことの出来ない大切なものです。昔から変わることなく繰り返し行われて来た農作業は、私達の暮らしが水と共にあったことを知る上で、とても貴重な経験だと思います。養老川の上流では、今でも江戸時代末期に作られた長水路が現役で使われており、川から山裾をめぐり、トンネルを抜け出て行く水はポンプの力を借りることなく、自然の力だけで高地の田んぼに届けられるのだそうです。昔の人達が知恵と努力で築き上げた水穴は、農業用水に馴染みの薄い私達に、美しい景色とともに歴史を伝える役目を果たしてくれます。また、この地域には平成に入ってから作られた、多目的に使用されている高滝ダムもあります。隣接するように「水と彫刻の丘」も建てられており、「水」の美しさや大切さを、五感で体験できるので、自然と関心も高まり、学ぶことも沢山あります。美しい養老川を守ろうという気持ちは、川の下流にあたる市街地に住む人達の間にも広く伝わり、いつまでも子供達が安心して川遊びを楽しめる環境を……と、さまざまなメディアを通して呼びかけをするなど、日々努力が続けられているそうです。私達一人ひとりの生活排水へのモラルが、川の未来を決めてしまうことを改めて感じました。

川の水が、いよいよ海へ流れ出ようとする頃、辺りの景色は一変します。なぜ

ならここには、高い煙突が空に向かってそびえ立つ京葉工業地帯が広がっているからです。三井造船、旭硝子、古河電工といった名立たる大きな工場がひしめき合い、昭和三十年代から現在まで、多くの人達が働き、経済の発展に尽力して来た場所でもあるのです。農業同様に工場でも、原料や製品の洗浄などで、大量の「水」が使われます。この工業用水を確保しているのは、私が幼い頃から遊び場として慣れ親しんだ「子供の国」をぐるりと囲むように作られた山倉ダムです。工業用水の使用量においては、県内で最も多く、約半分を占めているそうです。いかに効率よく「水」を利用して行こうかと、工場でも回収水施設を作るなどして、再利用に努めています。その成果は、千葉県が水の回収率全国一位という実績にも表れ、節約に大きく貢献しています。

これまで私達は、安定した水の供給と穏やかな気候に助けられ「水」のない生活を味わうことなく過ごして来ました。しかし、この幸せな環境が「水」を貴重な資源だと考える力を弱めてしまったのも事実です。毎日の生活を振り返って見ても、細かい心遣いを怠り、まさしく湯水のごとく「水」を使い、汚して来たのです。ここでもう一度、私達に関わる「水」が生活用水だけではないこと。食を支えるお米から、電気化学製品に至るまで、あらゆる面において「水」が間接的に私達の生活をサポートしてくれていることを念頭に置き、水資源の有効活用を目指すべきなのです。しっかりと自覚して行くことで、限られた資源を分かち合い大切に使う心や、美しい風景を守ろうとする気持ちが芽生えてくると思います。まずは、私から始めます。

## 「大河の一滴を求めて」

千葉県 船橋市立高根中学校  
二年 中 村 早央里

私の住む千葉県には「坂東太郎」とも言われる流域面積日本一の「利根川」が流れています。一番下流の銚子大橋の上から見ると、川は大河となり、今まさに海に飲み込まれようとしていました。

この大海となる最初の一滴は、一体どこから流れて来るのだろうかと、その水の一生を自分の目で確かめたくて地図を広げてみました。利根川を下流から上流へたどって行くと沢山支流があり、何本もの川の集合である事が分かります。そしてその中の一点は、何と「水芭蕉」で有名な、福島・群馬・新潟の県境にある「尾瀬」なのでした。

私は是非、自分の目で最初の一滴が見たくて、昨年夏の終り頃ひっそりとたずむ「尾瀬」を訪ねました。

山小屋の主人は、「水芭蕉の咲く頃や、夏休み中は大賑わいしていた」と、教えてくれました。早速最初の一滴の所在をお聞きしたのですが、尾瀬はその名の通り湿原で、あちこちから湧水していて、最初の一滴はどこにでもあるのだそうです。

それでも尾瀬ヶ原の木道を散策していると本当に、草木の根の間から「ポタリ、ポタリ」と一滴ずつ、まるで宝石の水晶のように輝きながら、次々と湿原に吸い込まれていくのです。それを見てみると、この大切な一滴を愛しくさえ思えてくるのです。手ですくって口へ含むと、何と美味しい極上の天然水なのでしょう。これ以上ないミネラルウォーターに至福の一時を味わいました。

やがて湿原から流れ出た水は小川となり、沢を下り下流へと流れて行きます。「分水嶺」と言つて、この辺りで標高の高い「燧ヶ岳」や「至仏山」へ降った雨や雪溶け水が地下へ吸収され、何百年・何千年と掛けて湧出した水が、或る流れは太平洋側へ、或る筋は日本海を目指して流れて行くのです。

ですから轟音を立てて流れる大瀑布「三条大滝」の流れは「只見川」となつて、日本海へと下つて行くとのことでした。

今、私が目にしたこの一滴は、海水が蒸発し雲となり、雨や雪となつて再び地上に降り地下へと吸収され、長い年月を経過して地表へ湧出した貴重で尊い、美しい水なのです。

地球の水は、正にこの繰り返しなのです。地球は、よく「水の惑星」と言われますがこの大宇宙の中で、偶然に「水」を得た唯一の星であり、地球上の生きとし生ける全ての生物にとつて、「水」は正しく生命を育む根源であり、命の源なのです。

最近のNASAは、火星探査車が見つけた岩を調べた結果、かつて火星の地表にも海が存在し、生命が誕生したかも知れないと驚くべき発表をしました。地球の他にも生命が居たなんて、何とロマンティックなのでしょう。

さて、水の惑星と言われる地球ですが、ほとんどは海水であり、生命に係わる淡水はほんの少ししかない為、水は限り有る資源です。

現在、イラクへ人道復興の支援に行っている自衛隊の人達が危険を顧みず、戦争で破損され、満足な水さえ手に入れる事の出来ないサマワ周辺の人達の為に、給水車で水を運んでいるニュースを見た時、汚染されて病気になる様な水を飲むだけだった人々に笑顔が戻る様子に大変感動しました。この様な人道復興の為に自衛隊派遣なら、私も賛成です。

日頃「水」を使用する事を当然とし、深く考えた事もなかった私ですが、今後は「水」の有りがたさを知り、水の恩恵に浴している事に感謝したいとつくづく思いました。

そして「水」を使うと言うことは、水を汚すことなんだと肝に銘じ、今後は普段の生活から「水」を大切に使用し、汚染させないよう努力し、大事に利用させて頂いて、次の世代へとつなげて行こうと、尾瀬の一滴を思い出しながら心に誓いました。



## 「引地川のダイオキシン問題から見たもの」

神奈川県 藤沢市立湘洋中学校

二年 井上

茜

誘われるような釜揚げシラスのにおいがこの町から消えてずいぶん経ちます。店構えをしていない一軒屋から、立ち昇る湯気を見かけると茹で上がったばかりのシラスを母にせがんで、買ってもらいました。

朝網で捕れた茹でたてのシラスは、決して生臭くありません。ほおばるとふっくらとした魚の甘味が口の中、いつぱいにひろがります。もう、食えることができないと思うと残念でなりません。

二〇〇〇年三月、私の住む藤沢市の引地川で、高濃度のダイオキシンが検出されました。川に隣接する企業が、焼却炉の排ガスを洗浄するために設置したスクラバーの廃水を引地川に放流していたことが、原因とわかりました。その後、この企業は、行政措置を受けましたが、近隣に及ぼした影響は、大きなものとなりました。引地川の河口は、江ノ島にほど近い鵠沼海岸で、シラス漁、うなぎの稚魚漁が、行われています。当然のことですが、シラスからも高濃度のダイオキシンが検出されました。

発がん性の高いダイオキシン検出の影響を受け、地元の魚や野菜を買うことを誰もがためらうようになりました。そして、釜揚げシラスのかおりも消えてしまいました。

引地川河口に一番近い鵠沼橋から、望む江ノ島は、美しく、稲荷橋付近には、かわせみも生息していました。るり色に輝く胸毛の小さな鳥は、体に似合わない長いくちばしに小魚をはさんで、排水口である塩ビ管から出入りしていました。その姿を見かけなくなったのも、ダイオキシン騒動の数年前からでした。川の「水」の汚染は、そこで暮らす生き物や人々の生活を変えていきました。河川は、海に流れこみます。漁業に携わる方達は、深刻な打撃を受けたと思います。私自身、数え切れないほど、この川の流れこむ鵠沼海岸で海水浴し、魚釣りをしまし

た。ある時は、カヌーに乗って転覆し、たつぷりと引地川の水を飲みました。ですから、ダイオキシン調査の結果を知り、心底怖くなりました。

しかし、この事件によって、環境に対する意識が、高まったことも確かでした。鵠沼海岸で波乗りをするサーファー達も関心をよせて、積極的にこの問題と取り組んでいました。また、市民もいかにダイオキシンを減らすか、真剣に考えました。私達地域住民の間では、原因が、焼却炉から出る物質にあったため、家庭用焼却炉を撤去しました。

比較的ゆるやかだったゴミの分別方法も不燃、可燃、プラスチック、資源、ペットボトルと収集日が分けられるようになりました。

このように「水」の問題は、私達の生活に直接影響を及ぼします。ダイオキシンが検出されたから、その責任を企業に問うだけでは解決になりません。根本的に考え直す必要があります。

まず、都市河川の「川は排水路」という図式から抜け出さなければならぬでしょう。そのためには、家庭の排水から気をつけて、汚染につながるものを流さないという心構えが必要です。

また、「水」の汚染は、あらゆるところでつながっています。たとえば、今回の事件で原因となった焼却炉から出る物質の問題です。家庭用焼却炉は、ゴミ削減に役立ちそうですが、低温で燃焼するため、リスクが高く、ダイオキシンを発生します。土壌から地下水に及ぼす影響を考えると使用は好ましくありません。正しい知識を持ち、誰もが、生活、命を支える「水」に関心をもって、日々の暮らしの中で、汚さないための努力をしていくことが、大切だと思います。引地川のダイオキシン問題は「水」を守る新しい考え方をするチャンスでもあると思います。

## 「水は無限？」

福井県 福井大学教育地域科学部附属中学校  
三年 船橋 充

僕の住んでいる福井県は、昔から「越前若水」といわれ、越前の山並みと若狭の美しく清らかな水に恵まれた地とされている。今でも美しい水の風景があらこちらに見られる。また、福井という地名は、福井城址の中にある「福の井」という古い井戸に由来する。築城当時、この城は「北の庄城」と呼ばれたが、三代藩主が入国して以来、北は敗北につながることから、「北の庄」の名を不吉と考え、この井戸の名を取って、この地を「福井」と呼ぶようにしたという。このように水と深い関わりをもつ福井は、まさに水の国と言える。多くの滝があり、大きな川があり、街の中にも水をたたえた場所が数多くある。美しい自然は、豊かな水のたまものかもしれない。この美しい水の国を守るために、僕たちに出来ることは、なんだろうかと考えてみた。

僕は、ボランティア委員会に所属しているが、その中で、アフリカの国について調べたことがあった。ここで暮らす人々は、生活に使う水を何キロも離れた川へ、歩いてくみに行かなければならない。小さな子供も、大人を手伝って水くみをする。僕はこの川をきれいとは思わない。なぜなら、この川は生活に使うための水の源として利用されるだけでなく、排泄を行う場でもあるのだ。それでもこの川の水は、この国の人々にとって命の水なのである。僕たちは毎日何気なく水を使っている。蛇口をひねるだけで、いくらでも水はでてくる。いつでも、どこでも、好きなだけ水を使うことができる。だからこそ、不自由なく使えることに感謝し、水を大切に使うていかなければならないと思った。そして、水を大切にするために自分にできる小さなことからいいから、こつこつとすればいいと思った。

僕たちが出来ることの一つに、「節水」がある。例えば、お風呂の残り湯を洗濯や掃除に使ったり、水まきに使ったりする。また、水道の水を流しっぱなしにし

ないことなど、ちよつとした心掛けで、節水になる。蛇口のひねり具合によって違うが、歯を磨く時に三十秒間水を流しっぱなしにすると、約六リットルの水を使う。これをコップにくんで磨くと三杯程度(約〇・六リットル)の水ですむのだ。つまり、五リットル以上の節水になる。これを一人でも多くの人が行えば、ぼうだいな量を節水することができる。何よりも大切なのは、一人一人が水に対する意識を高め、大切に使うていこうと思うことだと思う。また、自然を守ることも、水を守ることにつながると思う。自然を汚さないことや、森林を大切にし、水源となるものを守っていくことで水を守ることができる。

僕の見た美しい水の風景の一つに、三方五湖がある。あの透き通った水。心から消すことができなくなったあの風景。一瞬、時が止まったような、そんな気がした。その日の天気や季節により、その湖から受ける印象は、きつと変わってくるのだろう。状況によって姿を変えることのできる神秘的で、不思議な力を感じた。

豊かさの中にいると、その豊かさに気づかないことがある。僕たちは、水に恵まれた美しい風景の中で暮らしていることに誇りを持ちたい。今はまだ、水に対して小さなことしか思いつかないし、このような機会がないと深く考えることができなかったけれど、いつの日か水の大切さを訴えることのできるようになりたい。そして、一人一人が水を大切に、自然をいつまでも守っていかねければならないと強く感じた。

## 「源流の一滴に感謝して」

山梨県 山梨学院大学附属中学校  
三年 大塚 美 都

新緑が美しく輝く山々。澄んだ空気。そして足元には、小魚たちを気持ちよさそうに泳がせながら、さらさらと流れる小菅川。その水を両手にすくってみるとひんやりと冷たく、水しぶきは宝石のように光っています。これが、多くの人々の生活を支えている多摩川の源流なのです。小菅村では、すべてのものがきらめいています。

我家では毎年五月の連休に、小菅村の「多摩源流まつり」へ出かけます。今年も、お祭りを見ながら川釣りやバーベキューをして、楽しい時間を過ごしました。日差しが強くなりテントを張っていると、通りがかりのおじさんが、私たちにロープの結び方を教えてくれました。それは、慣れた手つきの野外活動のキャリアも長そうな人でした。その人にお礼を言つて後ろ姿を見送ったその時です。その人は、何と歩きながら吸っていたタバコを、ポイと投げ捨てたのです……。

小菅村は、山梨県の東部にある水と緑が美しい、人口千人余りの小さな村です。村の中央を流れている小菅川は、奥多摩湖を経て多摩川となり、東京湾に注いでいます。流域の何十万人もの人々に水を供給するだけでなく訪れる人々の心を癒し、楽しませてくれます。「多摩源流まつり」は小菅村が中心となり、源流の美しさを知ってもらうために企画された祭りだそうです。源流域は年々過疎化が進行し、村の維持も厳しい中で、多摩川の源流らしさを追求した村づくりに頑張っているのです。村役場で、源流交流推進室長を務める私の伯父は、「多摩川『最初の一滴』学習会」を企画したり、流域の市町村に呼びかけて、多摩川の自然を守るネットワークづくりをしたりしています。

そんな伯父はいつも、「川は一本でつながっている。源流域に住む我々だけが川を守る努力をしても、中流・下流域に住む人たちにも同じ気持ちが必要ならば、川を守りきることはできないんだ。」と言っています。私はこの村に行くと、いつ

も多摩川源流の自然を愛する心と熱意に心を打たれます。

何気なく投げ捨てられたタバコの吸いがら。その下の土の中には、何億もの微生物が住んでいるかもしれません。また、ニコチンが長時間をかけて、源流の一滴を汚すかもしれません。私たちが快適に生活しているこの建物の下にも、何年もの間じつと外に出るのを夢見ていたセミの幼虫が、何百、何千といたかもしれません。彼らの命の犠牲の上に私たちの生活が成り立っているのです。

私たちは自然界の生態系の一部のはずなのに、便利で楽な生活を追求し続け、森を壊し、空気や水を汚すという自然破壊を繰り返してきたのです。

何年も前から、「地球を守ろう」「温暖化ストップ」など、いろいろなキャッチフレーズがあふれている世の中なのに、目に見える効果が出ないのはなぜでしょう。かつこいい言葉はいらないのです。私たちが、小さな生き物に対する優しさ、川の最初の一滴に感謝する素朴な生活を思い出せばいいのです。

私たちには自然の恵みに感謝し、先人たちから受け継がれてきた豊かな自然をもっと大切にして守っていく責任があるのです。ひとりひとりが自分の生活を見つめ直し、自分で考え、地球に対する優しさをもって、やれることから実行に移していくべきだと思います。

川を汚す一番の原因は、生活排水だそうです。おわん一杯のみそ汁を流した場合、魚が住める水に戻すには、お風呂五杯分の水で薄める必要があるそうです。残飯やゴミを減らすこと、洗剤を使い過ぎないことなど、毎日の生活の中で小さなことから始めてみませんか。

コンビニで買うペットボトルの水しか飲めなくなる日が来る前に。

## 「水の大切さ」

山梨県 駿台甲府中学校  
二年 佐藤 彩香

一九九五年、阪神淡路大震災が起こった。私は、この大震災を、五歳で経験した。大震災は、私が寝ているときに起こったため、何が起きているのか分からなかった。大震災が起こったと実感したのは、朝起きて、食器棚やタンスが倒れていた、テレビが転がっているのを見たときだった。食器は割れていたし、部屋はグチャグチャになっていた。

また、この大震災のときに、ライフライン（水道、電気、ガス）が閉ざされてしまい、水道から水が出なくなったり、いろいろな所へ、みんなが水を求めて、動いていた。井戸がある家は、『自由にお使いください。』と、親切に札を出してくれていた。しかし、その井戸も日が過ぎるごとに、どんどん細くなっていった。

そして何日か経つと、給水車がまわりだした。するとみんなが、水が入る入れ物を持って、「水が来たぞー!」と言いながら、行列を作って、水をもらうのを待っていた。私も小さいながら、水が入る入れ物を持たされ、行列に並んだ記憶がある。

でも、自分の二、三人前で、タンクの水が終わってしまい、せっかく並んだのに……、と残念な気持ちになった。だからといって、ここで列からぬけてしまえば、次に来たときに、またもらえなくなってしまう。だから、次は何時間後に来るか分からない給水車を待って、行列に並び続けた。何時間も並んで、やっとのこと、水をもらうことができた。

しかし、もらってきた水だけでは洗たくもできず、料理に使うのがやっとだったそうだ。そういうときには、お皿にラップをして、よごさないようにして、洗わないですむようにしていたものだ。

その経験から今では、お風呂のお湯は、次の日の入る直前まで抜かなくなった。

それはトイレを流す水に使えたりして、家の中で一番貯蔵できる水の量だからだ。そして、水も入れられるタンク（灯油を入れているポリタンクの水用のもの）も買った。また、水の二リットルのペットボトルケースは、常に常備している。その時の教訓から私は、小さいながらも水の大切さを覚え、節水に取り組んでいたような気がする。

しかし、あれから、何年経ったのだろうか。

水が豊富で、おいしい、甲府市に住んでしまったためだろうか、自分の意識が水の大切さについて、少しずつ、うすらいでいるように感じた。

今、もう一度あのときのことを想い出し、水の大切さを、自分に意識させたい。震災から、二、三週間後、私たちはおばあちゃんの家に戻った。じゃ口をひねって、水が出てくるのを見て、感動したことを覚えている。

そして、ライフラインが復旧した後、宝塚に戻って、母が真っ先にお礼に行った所は、あの井戸水の家だった。「あのときの水が、なかったら……。」と言って、お礼を言っていた。

今、私たちは、日本でそのまま飲めるきれいな水があるが、発展途上国の人々は、まともにきれいな水が飲めなくて、困っているという。

私は、それを聞いたときひどいショックを受けた。なぜ、同じ地球上の国なのにこんなに大きな貧富の格差があるのだろうか……、と。

世界中の人々が、今ボランティアで、砂漠に苗を植え、森をつくって、水源をつくったり、また、アフリカの方では、水源をつくるために、井戸をつくったりしているという。

このことを聞くと、私も小さな事一つでもいいから、協力し、近い将来、必ず貧富の差がなくなるよう、祈り続けていきたい。



## 「水の豊かな生活の中にいて」

静岡県 不二聖心女子学院中学校  
三年 臼井 裕香子

昨年度、岸田袈裟さんという、アフリカのケニアで貧しい人々を支援している方が学校に来て講演してくださいました。岸田さんがケニアで行ったことの中に現地の人にとっても喜ばれた活動がある。それは水をきれいにする装置を設置するという活動であった。岸田さんはこの装置について現地の人に理解してもらうために二十回以上も話し合いを重ねたという。それまで村の人は川の水を飲んでいたため、五才以下の子ども、特に赤ちゃんがマラリアやコレラで亡くなる死亡率が高かったという。水の装置はセメントで作られた箱に小石や砂を入れ、そこに水を流して汚れをこしとるというものだった。装置の中を流れている間に水は浄化され、村の人はきれいな水を飲めるようになったのである。これにより五才以下の子どもの死亡率は大幅に減少したのだった。

岸田さんは村の様子を写したビデオを私たちにを見せて下さった。水を嬉しそうにすくっている子どもたち。彼らの輝いた目を私はどうしても忘れることができない。

この講演会をきっかけに次第に私は「なぜ私はこんなにも豊かな暮らしをしているのだろう」と思い始めた。岸田さんの講演を聞きながら「村に住むこの子どもたちのように、いつも飲んでいる水を嬉しそうに神様に感謝しながらすくうことが私にできるだろうか。」と思った。コンビニエンスストアに行きペットボトルを買う自分の姿が思い出された。ペットボトルの水を飲む時の私は神様への感謝の思いを抱いたりしていない。私は彼らより多くの物にふれているが心は彼らより貧しいのである。

私はこの春休みに英語を学び他国の文化を知ろうとオーストラリアを訪問し、ホームステイを体験した。オーストラリアは水不足の地域が多い国だ。私は富士市に住み、毎日富士山の雪どけ水を飲んで水で困ることなどない。しかし、オース

トラリアでは温水タンクのお湯の使用量の限度が決められている家庭が多い。

その水不足の対策として私は次のことを体験した。

一つ目は食器類はすべてため洗いされていたことが挙げられる。家族全員の食器を一度に洗うため、洗う前には必ずキッチンペーパーなどで残飯、油をとり除いた。そしておやつチョコなどお皿にこびりつきそうなものを食べる時にはすべて紙皿を使用していた。洗濯は一回に五〇ℓ近くの水を使うために必ずため洗いされていた。

二つ目はペットボトルの使い方についてである。日本は五〇〇mlのペットボトルをコンビニで買い、飲み終えたら捨てるという人が多い。最近ではペットボトルを分別するゴミ箱を設置する地域もある。それに対し、オーストラリアは一度空になったペットボトルを何回も活用していた。日本と違って自動販売機ではペットボトルの水が売られることもない。

このホームステイを体験し、私の中で常識だと思っていたことが次々に変わっていった。水にあまりにも恵まれすぎていてその存在を当たり前のように感じていたのだと思う。たとえ水や物に恵まれていても、それらの恵みに感謝する気持ちを忘れてはならないと今回のオーストラリアの訪問で強く感じた。

岸田さんが訪問した村の少年達のように水の大切さを考えられる人間に私はなりたい。富士山の雪どけ水が飲めることを感謝できる人間になりたい。そして多くの日本人が水の豊かさの中に自分がいるということを考えるようになってほしい。そう私は祈っている。一人一人が水の大切さを考えるようになれば、その時はきっと日本人の心も水のように澄んでいるにちがいない。

## 「富士の湧水池」

静岡県 不二聖心女子学院中学校  
一年 三 浦 明日翔

富士市のおいしい水はどこからくるのだろうか。答えは富士山の地下水にあった。富士市の水源は百パーセント富士山の地下水に依存しているそうだ。富士山に降った雨や雪が地中にしみこみ、地層による自然のろ過をくり返し、数十年から数百年もの時間をかけ、清らかな水となり、その水を私達は使っているのだ。

三年前「湧水源を歩こう」という市の企画に私は参加した。湧水が豊富だという富士市原田地区で市の方の説明を受けた。何ヶ所かまわっていると共通することがあった。湧いている水に手をつけると、どこもとてもつめたく澄んでいたということだ。水質検査でもやはりとてもきれいな水であることがわかった。湧水は、何十年何百年もの長い時間の結晶である。それだけにいろいろな不思議もある。滝不動というところでは、皮膚病にきくという不思議な湧き水があった。そこで私も蚊にさされた所に湧水をつけてみると、すぐにかゆみがひいたように感じた。他の湧水池の近くにも洗たくをすると汚れがよく落ちる水もあった。私達は、たまたま洗たくをしている人に出会った。話を聞くと、「洗剤をつけなくても、漂白剤につけたみたいにかれいになるんだよ。」と教えていただいた。昔は洗たく機などなく、川で洗たくをしていた時代もあっただろう。洗剤などなくても川の水はきれいだっただけから洗たくもできたのだろう。きれいな水には、漂白剤がわりになるような成分、なにか自然の不思議が入っているのかもしれない。洗たくをしていたこの方は学校帰りに飲んでいく子や、東京などの都会からきて水をくんでいく人もいるとも教えてくださった。ために飲んでみると本当においしかった。富士山の下を通るだけでたくさん活用できるすばらしい水になってしまいう自然の力は偉大だと思った。

水源にはもちろん生き物もいる。きれいな水にしかすまないカワニナやサワガニ、ホタル・ホタルの幼虫などだ。ウグイのような黒い魚やハヤもいた。植物で

は、バイカモなどである。

富士市にある湧水は、水量や湧水池の数が減ってきているという話を聞いていたので心配だった。三年経った今、湧水の量はどうか、枯渇してしまっている所はないか、水はきれいなままか、気になった。最近、硫酸ピッチの不法投棄のことが騒がれている。何年前、富士山ろく硫酸ピッチの不法投棄があった。地下水に流れこんだらどうなるのだろうか、今すぐでなくても何十年何百年後にあらわれるかもしれない。気になった私は、三年ぶりに湧水池をめぐってみた。

三年前とまわりの景色が変わってしまった所もあったが、湧水池は変わらず同じ所にあった。ボコボコと、音をたてて湧きでていた。水は澄み、移植したというバイカモはみごとに繁殖していた。水の中で小さな花を咲かせるバイカモは、ゆらゆらゆれながらうれしそうだった。近所の子どもたちはつり糸をたらし、ハヤづりをしていた。湧水池には小学生が書いたらしい『この川は湧き水です。きれいな水を守りましょう』という看板が立っていた。水を守るよう地域みんなで取り組んでいることがわかった。

「水を守る」ということは、水源地域でもしなければならぬことである。と同時に水の利用者である私達一人ひとりが、自然の水循環の中で何十年何百年かけてつくった恵みの水を大切にかしこく使い、使いすぎに気をつけることでもある。そして、水がくり返し使われることを忘れず、必要以上に汚さない努力をしなければならぬ。私たちの子孫が豊かな生活を営んでいくためにも、生き物たちのためにも、湧水池を守っていかなくてはならないと私は強く思った。

## 「水不足から学んだこと」

愛知県 東浦町立西部中学校  
三年 片 山 皓 平

水——これは、僕たちが生活していく上で欠くことのできないもの。顔を洗ったり、お風呂に入ったり、毎日起きてから夜眠るまで僕や家族は何度となくあたりまえのように水道の蛇口をひねって、あたりまえのように水を使っている。それに、僕は洗面所の蛇口をしつかり閉めないで、ポタポタ水が出ているのを母から注意されることがよくある。その時は、いけないと思うのだけど、水はいつでも蛇口をひねれば出てくるものという意識が僕の心にあるのかもしれない。

僕たちの住む東浦町は知多半島にあり、愛知用水からそれぞれの家に水道が引かれている。愛知用水は昭和三十六年に久野庄太郎さんが中心となって造った用水だと、小学生の時に学習した。僕の祖父は久野さんと同じ知多市の出身なので、祖父に愛知用水ができた頃の様子を聞いてみることにした。

祖父によると、愛知用水ができる以前は井戸水を飲み水とし、田や畑の水やりにはあちこちのために池を作って雨水を利用したそうだった。しかし、夏には雨がなかなか降らないで日照りが続いてため池の水がなくなったりして、農家の人たちはとても困ったらしい。これをみかねた久野庄太郎さんが浜島辰雄さんと協力して、愛知用水を完成させてくれたそうだ。祖父は二人を「郷土の誇り」と言っていた。愛知用水神社というのがあることも教えてくれた。僕は愛知用水ができたことで水の苦労がなくなり、生活が楽になってよかったと思った。七十歳過ぎの祖父は

「昔の水道水はおいしかったなあ。何杯でもおかわりをして、飲んだものだ。今の水道水は、カルキ臭くて飲みたいと思わない。」  
とも言っていた。

僕はこの水についての作文を書くにあたり、家族といういろいろ話をした。話の中から平成六年の夏は水不足だったことを思い出した。僕は保育園の年長だっ

た。大好きな給食が中止になってしまい、母の作ったおにぎりだけを持って保育園に通ったこと。楽しみにしていた水遊びが中止になったこと。家では庭の植木に水やりするために、今では使っていない井戸のコンクリート製のふたをはずして、ロープをしばりつけたバケツで父が水をくんでいたこと。僕も大変なことになっていっていると思い、一生懸命ロープを引っぱったことを覚えている。

消防士である父はとにかく大変だったと言っていた。火事を一番恐れたため、火の元に注意するよう市民に広報車で呼びかけたり、ビラを配った。また、水不足のために消火栓が使えなかったもので、ため池や用水の水を使うための準備をしたそうだった。市民のために給水所の設置をしたり、文化財の防火をはかるために用水の点検も注意深くしたらしい。幸いにも、火事は起こらなかったが、貴重な体験だったと当時を振り返ってくれた。

祖父が言っていた水道水の味の低下は僕たちが毎日使って流している汚れた生活排水がそのまま河川に流されていることにもあると思う。水道水は表流水（川や湖沼の水）と地下水（井戸や湧水）を原料に、それを浄水処理することで作られていると聞いたことがある。表流水が汚れていてはおいしい水が作られるわけがないと思う。今僕たちはゴミ問題や地球温暖化防止など環境についていろいろ勉強してきている。これからは水についてももっと考え、大切に使うていかなくてはと思う。水不足の経験を時々思い出すことも必要なのかもしれない。愛知用水が通水した頃のようなおいしい水を祖父にもう一度飲ませてあげられるぐらい、水道水がおいしくなればいいと思う。

## 「僕らの命の水―矢作川を守ろう―」

愛知県 豊田市立崇化館中学校  
三年 永田 晃 大

僕は、中学一年生の時から矢作川について調べ始め、今年で三年目になります。きっかけは、夏休みの宿題の理科研究でした。何を研究しようかと思った時、小さい頃からよく家族で遊びに行き、僕の住んでいる豊田市の水道水にも使用されている矢作川の水はきれいなのだろうかと考え、調べる事にしました。

一年目は、「矢作川探検―矢作川の水を調べよう―」と題して、矢作川の上流、中流二ヶ所、下流の計四ヶ所で、どのように変化しているか（水質、におい、色、地形、生き物、周りの様子等）を、PHチェックや五感をとおして調査しました。結果は、下流に行く程水は濁り、生臭くなっていることが分かりました。生き物も、きれいな水を好むものは、上流の方には生息せず、植物や虫、ゴミの量等も、あきらかにちがいがみられました。どうして上流ではきれいに澄んでいた矢作川の水が、下流に行くにしたがって汚れていってしまうのか、もっと深く調べてみよう、引き続き矢作川の水について調べてみることにしました。

二年目は、「矢作川（豊田市内）を汚している支流はどこだ、原因を見つけよう」と題して、上流から下流の十二ヶ所で、水質調査研究用のデータシートを作り、PHチェック、ペットボトルを使った透明度、透過度の検査、COD、アンモニウム、亜硝酸、硝酸、りん酸のパックテスト等を行いました。その結果、豊田市内で一番汚い支流は、市木川であること、その原因が大きな排水溝からの生活污水であることが分かりました。汚い所では、においや色だけでなく、水に触れると肌にしみる程水がよごれていました。昨年に比べると、長雨により今年の方が水質が良いこと、昨年の調査から自分が考えていたよりは、矢作川の水はきれいだったことでは、少し安心しましたが、工場排水も汚れの原因の一つではあるけれども、一番の原因は、僕たち人間が流している生活污水であったことは、ショックでした。他にも、下流へ行く程、人間が生活しやすいように川の形状を

変えるなど手を加えることで、水の流れが自然のものでなくなり、よどみが出てしまっていることも分かりました。

僕たち人間や他の生き物にとって、水はとても大切です。それなのにどうして僕たち人間は、海や川の水をどんどん汚してしまっているのでしょうか。人間のからだの半分以上は水で、水がなければ生きていけないくらい大切なものであることは、誰もが分かっていることなのに、いつでも蛇口をひねればきれいな水が出てくる今の生活が、当たり前になりすぎているのでしょうか。でも生きていくために大切な水が、確実に汚なくなってしまうのです。「これくらい大丈夫だろう。」という気持ちだが、大切な水を汚くしているのです。

では、水をこれ以上汚さないためには、どうしたらいいのでしょうか。まず僕たち一人一人が、水が僕たちが生きていくためにどんなに大切なものかということ、自覚することだと思います。そこで僕は、自分が出来ることは何かと考え、総合学習でも「川」をテーマに選び、ゴミ拾いをしたり、洗剤は石けんを使い、ゴミを減らし、リサイクルする等、家族と協力して生活污水が少しでも減らせるように考え実践しています。

僕一人が努力しても、矢作川の水がきれいになるわけではありません。でも、僕たち一人一人が何ができるか考え努力しなければ、矢作川の水はきれいになりません。矢作川を調べはじめ三年目の今年は、一年間の矢作川の水質の変化を調べ、三年間の研究の総まとめをしたいと思っています。僕の研究は今年で一つのくぎりを迎えますが、これで終りにせず、これからも、水に関心を持ちつづけ、水を守るために僕のできることを考え実践していきたいと思っています。



## 「命を育む水」

三重県 皇學館中学校  
一年 南 端 理 沙

私は真珠の名産地である伊勢志摩に生まれ真珠の仕事をする父をみて育ってきました。

私が幼い頃、冬の真珠の仕入れのシーズンになると、二ヶ月くらいの間、父は毎日志摩に行き、アコヤ貝から取り出されたばかりの真珠をたくさん仕入れていました。

ところが、私が大きくなるにつれて年々、父は四国や九州に仕入れに行くようになりまし。今年は一ヶ月二月にかけ一ヶ月近くを、仕入れのために出張したままになってしまいました。

なぜ、今年は志摩に仕入れに行かず長崎県の対馬や吉田湾に行くのか、父にたずねてみたところその理由を話してくれました。

父が言うには、志摩半島の海が赤潮や「ヘトロカプサ」という病原菌の大量発生によって汚染され、そのため真珠を養殖するアコヤ貝が、病気になるったり、死んでしまった結果、全盛期には二トン近くあった真珠の水あげ量が今では五分の一以下になってしまったそうです。

どうして、アコヤ貝のえさになる良質のプランクトンがいなくなったのでしょうか。以前は、森から出た腐葉土が水に溶けだし、栄養を含んだ豊かな水を海へ運び、その水がさまざまな命を育んでいました。しかし環境破壊が進み自然のサイクルがくずれてきたため良質のプランクトンが育たない海になったのです。

家族でこの話をしているうちに私は、そう言えば…と思いあたることはありませんでした。

小学五年生の夏休み、沢ガニなどがたくさんいる川の上流へ沢歩きに出かけた時、森林の中を流れる川と出会いました。その川の水はとてもきれいで、口に含むと甘く、コクがあり心に残るような味でした。その味は浄水器の水やミネラル

ウォーターとは全くちがうものでした。

また、私の弟は水生昆虫が好きで県内各地の川に出かけていますが、年々川の土手が整備されコンクリートになり、そのため水生昆虫は少なくなっていると言っていました。弟はタガメを飼いたいようですが今はタガメが住めるような川はなかなかないようです。

私の家の近くに勢田川と言う川があります。

毎年、七夕になると「勢田川を天の川に」ということで市民が協力してゴミ拾いをします。父が子どもの頃は豊かな水が流れ、水生昆虫もたくさん生息する美しい川だったそうですが、今はとても汚く少しくらいゴミ拾いしても変わらないと思っていました。そのため、私は一度もゴミ拾いに参加したことがありません。日々の生活の中でも水を大切にしようとして大人に言われても自分に何か出来るかなど考えたこともありませんでした。

川の土手や道路側の山をコンクリートで固めてあっても、がけ崩れや洪水などから身を守り私たちが安心して暮らしていくには必要な事だと思っていました。

しかし、身近でおこっている出来事について一つ一つ考えていくと、このままでいいのだろうか。中学生の自分に出来ることは何かないか。と思いはじめました。人間は自分たちが便利に暮らすために自然に手を出しすぎてきた事に気付き、たとえ何年かかってでも命を育む水を取りもどしていかなければならないと思います。

一人一人の力は小さいけれど、水の大切さ、自然の大切さを意識して生活することによって未来の川や海は随分ちがってくるでしょう。

私は今年の七夕に勢田川のゴミ拾いに参加してみようと思います。

五十年後、百年後、勢田川にまた命を育む水が流れていることを夢みて…。

## 「琵琶湖の水と私たちの暮らし」

滋賀県 守山市立守山中学校  
一年 清 原 光 咲

私のおじいちゃん、おばあちゃんは、琵琶湖の中の島、沖島に住んでいます。この連休も、沖島に帰ったので、琵琶湖の水の話を聞いてきました。

おばあちゃんが若いころは、水がとてもきれいで、朝一番に水がめに、飲み水の水をくみに行ったそうです。また、素足で水に入ると、魚が足をつついてきたり、素手で魚がつかめるほど、魚がたくさん泳いでいたそうです。

ところが、四十年くらい前から琵琶湖の水は目に見えて、汚れてきました。農薬の使用や、工場排水、琵琶湖岸の開発などによって、琵琶湖の水が汚れ、魚や貝が住みにくくなっていったのです。

琵琶湖に赤潮が発生し、あちこちで大量の魚が死んでいるのが見つかるようになりました。合成洗剤を使わないようにしようという運動も、始まりましたが、水の汚れを止めることはできませんでした。

私は、毎年夏になると、いつも琵琶湖で泳ぎますが、水はとてにごっているし、ゴミもよく流れてきます。魚もめったに泳いでいないし、素手で魚をつかまえていたとか、まして、飲み水にしていたという話は、信じられません。でも、琵琶湖をここまで汚してしまったのは、私たち人間なのです。

湖岸を車で走っていると、道はとても整備されているし、一見、ながめはともきれいです。しかし、この道路を作るために、どれだけの自然をこわし、水を汚してきたことでしょう。私たち人間は、こうして自分たちの便利さと引き換えに、琵琶湖を汚し続けてきたのです。

水は、私たちが生きていく上で、欠かすことのできないものです。飲む、食べる、お風呂に入る、洗たくをする、トイレを使う、掃除をする、どの場面を取っても、水は必要です。特に、琵琶湖の近くに暮らし、琵琶湖と深い関わりを持っている私たちこそが、まず水を大切にすることをしなければいけないのではない

でしょうか。

このごろテレビを見ていて、

「えっ、本当に？」

と思うコマーシャルがあります。それは、カレーがいつぱいいたおなべに、直接洗剤を入れて、汚れを浮かして洗う、というものです。私は、おわん一杯のみそ汁を流すと、その水を元に戻すためには、おわんに何杯もの水が必要になる、という話を聞いたことがあります。だから、あのおなべのひどく汚れた水を流す、というコマーシャルが普通に流されていることが不思議に思えたのです。

私の母は、カレーのおなべを洗う前に、野菜の皮や、牛乳パックで汚れをきれいにふいてから洗います。お米をといたとき汁も、台所に流さなくて、庭の花や木にやります。私も、琵琶湖岸のゴミ拾いに参加したり、水道の水を出しっぱなしにしないように、気を付けています。

一人一人のできることは、小さいかもしれないけれど、水に関心を持って、生活の中でできることから始めれば、それが積み重なって、琵琶湖の水がきれいになることにつながるのではないのでしょうか。

おばあちゃんの言っていたきれいな水に戻るには、汚れた時間の何倍もの時間がかかると思いますが、一人一人が小さな一歩をふみ出すことから始めれば、いつかその日はやってくると思います。

## 「水について考える」

大阪府 四條畷学園中学校  
二年 田 中 伶 佳

私の家では、あまり生水を飲む習慣がなかった。祖母が薬を服用する時ぐらいであったので、母が、寝る前にやかん一杯の水道水に十センチ程の炭を二本沈めて、翌朝まで置いておき、それを冷蔵して使っていた。

最近、コレステロール値を考え、父がかなりの量の水を飲用するようになり、台所には市販のミネラルウォーターのペットボトルが並ぶようになった。私自身は、スポーツ飲料に手が伸びるが、健康を考える時、水はなくてはならないものだと思った。

そこで、私の住んでいる四條畷市の水道について、調べてみた。近畿地方に住んでいるからには、琵琶湖・淀川という水源地にたどりつく事はわかっていたが、なんと四條畷市では、一九五七年に給水を開始した時には、室池を水源としていた。驚いた。もっと遡れば、室池は田畑で使う水をためておくため池であった。何度もの日照りと水あらしをへて、より多くの水をためることができるようにと、今に残る東堤と新池が作られていた。室池の水は、本当に命の水であったのだ。スケールは違うが、琵琶湖を守る滋賀県の人々と重なった。

その後、人口がふえたり、生活の様子がかわったりして、必要な水の量が徐々に増加し、市は、田原地区の地下水をくみ上げ、並行して府営水道の水を買ったりして水量をふやしているが、私が生まれた頃、わずか十四年前においても年間使用量の二十三％を室池の水から、約三％を地下水でまかなっていた。この資料をみつけた時、私は嬉しく感じた。地元の水を飲料水として飲める事を誇らしく思ったからだ。

その当時、田原小学校のプールには地下水が使われ、真夏でもとても冷たくて透き通っていて、飲んでも大丈夫と言われていたそうだ。

その後、四千人ほどだった給水人口が約五万六千人になり、家庭からの排水な

どにより、室池の水が汚れ、水道水の臭いや味が悪くなるという問題が出てきた。この時に、市民の意識を室池の水質を守る事に向けられなかったのだろうか。取り組む時間的な余裕もなかったのだろうか。ついに、一九九八年に清滝浄水場は廃止されて、室池の水は使われなくなってしまうた。そして、田原の地下水をのぞき、全面的に水源を府営水道に切りかえることになった。

私は、とても残念な気がした。昔から大切に守られてきた室池の水を、私たちの時代で汚してしまった気持ちだ。今では遊歩道が整備され、市民の憩いの場所となっているが、再び四條畷市の水源の一つとして復活させる事はできないものだろうか。そんな事を考えた。

わたしたちが使う水には、多くの人々の努力があり、たくさんの費用もかかっていることを知った。雨が降るからといって、水はいくらでもあるというものでもない。水質や水源を大切にするための知恵が必要だと思った。

## 「生命の源」

奈良県 川上村立川上中学校  
三年 泉 谷 翔 太

僕の住んでいる川上村には、清流吉野川が流れています。村のほとんどは山で、どこにいても緑が目につきます。そんな川上村にはどこにだって「水」があります。僕にとつて水は大切なものですが、ありがたいものとか、貴重なものとは思っていませんでした。この村に住んでいれば、いつでもどこでも手に入るからです。だから今まで、水について考えたこともありませんでした。そんな僕が初めて水について考えたきっかけは、ダムでした。最近、川上村に新しいダムが作られました。僕は川上村にダムが作られると聞いたとき、とても嫌な気持ちになりました。なぜなら、僕の大好きな吉野川の一部が、ダムにつかってしまうからです。僕はこの川上村の自然や景観も大好きです。ダムができ、川上村の景色がガラッと変わってしまうのも嫌でした。「何故この川上村にダムが必要なんだろう。」僕はずっと疑問に思っていました。そこで、一度ダムについて考えてみることにしてみました。

まず、パソコンで、ダムのホームページを見て見ることにしました。初めに、何故ダムが作られることになったかを調べました。ホームページには、「昭和三十四年の伊勢湾台風で、紀ノ川流域に多大な被害が出た。同じような被害が出ないようにするために作られた。」

と、書いてありました。伊勢湾台風の被害については、学校でも習ったし、僕も知っていました。川上に作られたダムは、洪水時に上流からの河川流量を調節し、下流の河川流量を減らすことによつて、下流の洪水被害を軽減することができそうです。洪水調節の他にも、奈良県内と和歌山県への上水道と工業用水の供給や、約一万世帯の電力量を供給できる水力発電など、様々なはたらきをします。

僕はダムの様々なはたらきを知り、川上村にダムが作られる訳を理解すること

ができました。「治水」という言葉がありますが、字の通り、水を治めるという意味です。武田信玄が暴れ川を治めるために信玄堤を作ったように、洪水から下流の地域を守るためにダムが作られたと考えようと思いました。

突然ですが、人の体の約六十％は水でできています。そしてさらに言えば全ての生物は海、すなわち水から生まれました。そして人間は水が無いと生きていくことができません。日本にいればどこだって水は手に入ります。でも世界にはそうでない地域もあるのです。僕は今でも水はあたりまえにある物だと思ってしまう。ほとんどの日本人が僕と同じだと思います。しかし大切なのは、一度考えてみるのだと思います。これから僕は水に対して、もっと水に対しての感謝の気持ちをもち、そしてこの恵まれた環境にあるからこそ、もっと水を大切にできるよう、努力したいと思います。

## 「水筒の水」でできること

和歌山県 貴志川町立貴志川中学校  
三年 奥野舞子

私が生まれる少し前まで、両親は何度か山へ登っていたという話を聞かされてきたことがある。山といっても、この辺の山ではなく、有名な富士山やアルプスというような高い山へ登っていたという。ある日、父が北アルプスへ登った写真を得意げに見せてくれた時、とても印象に残った話がある。

テレビでよく見かける、岩に釘を打ってロープを体に巻きつけて、よじ登るヤツ？と聞くと「それはロッククライミングや。父さんらは、山のふもとからテントと寝袋と食料をかついで、ただ登るだけや。縦走」といって高い山の尾根づたいに幾つもの山を渡り歩くんや。「ふーん。そんなことしておもしろいの」と聞くと「日本でも海拔が二千メートルを超えると大きな木も生えてないから、見晴しが良くてまるで雲の上を歩いているみたいやった。」父は思い出したかのように「きれいな高山植物のお花畑や鏡のような池があったり、残雪を踏みしめて歩くんやで」と写真を見ながら、あまり嬉しそうなので「そんな所やったら私も連れていってよ」と言う。「でもなあ、登り坂で荷物が重かったらホントにしんどいから、水は水筒一本分位しか持たれへん。できるだけ荷物を減らさんと体力が続かんし」私は水筒の水がなくなったらどうするのかと聞き返した。「山小屋で買はんや。一リットル百円やったかなあ」私は山にもちゃんと水道があるんだなと思ったが、その水は水道の水ではなく、山小屋の屋根に降った雨の水だと父は教えてくれた。高い山の尾根沿いには川や池などないので、ほとんどの山小屋では降った雨水をタンクに貯めておけるようになってるそうだ。私は驚き、雨の水を飲んで病気になったりしないのか、それが百円もするのか尋ねた。父は「高いと思うかもしれへんけど、絶対に必要やからたとえ千円でも買うと思う。水がないとご飯は炊けやし、第一に喉が渴いて山歩きが続けられへんようになるから」と言っていた。

「でも、水がないなら工夫や知恵が働くもんやで」へえどんな知恵？「少ない水でもお米はとげるしラーメンもたける。歯みがきもコップ一杯の水でできる。」と教えてくれた。「じゃあ、汚れた食器はどうするの」と疑問をぶつけると「ホントに貴重な水やから、家でやつてるような洗い方はできへん。どうするかわかるか？」さあ：「使った鍋や食器に、水筒から水を数十滴たらし、トイレットペーパーを丸めた紙玉で拭くんや。これを何回かくり返すとピッカピカになるで」私は、へえと感心したが、そんな少しの水で拭いただけで大丈夫なのかと心配になった。「山では水を一滴も無駄にしたらあかん。脱水症になったら命も危ないからなあ。屋根に降った雨の水でも水筒一本分あればホントありがたいんや。不思議と腹もこわさんし！」：と私が記憶しているのは、こんな内容だったが、今思えばどうして毎日水筒二〜三本分の水だけでキツイ山登りの生活が一周間もできるのかと、不思議でしやうがない。

この話に比べると私の日常生活は一体何だろうかと思う。便利な生活の為にどれだけ沢山の水を使っていることだろう。何十倍いや何百倍もの水を使っているに違いない。山登りの時のように、毎日毎日、最小限の水で暮らすことはできないにしても、私達の生活を真剣に見直してみることで、使う量をもっともつと減らせると思う。

水を大切にするということは、「できるだけ汚さない」という気持ちと「節約して使う量を少なくする」そして「何度も使う」という行動があつてはじめてできることだと思う。

美しい水と緑に輝くこの「地球」を未来の人達に引き継ぐために、一本の「水筒の水」の貴重さをあらためて考えてみたい。



## 「水―かけがえのないもの―」

島根県 邑智町立邑智中学校  
三年 岡 先 美智子

「今年中に、私の家に水道がつく。」

こう書くとき多くの人は今のこの時代に水道がないなんて、と驚くだろう。

私の家は谷あいの十一軒ほどの集落にある。昔から近所どうし助け合いながら暮らしてきた。水は各家、山水や地下水に頼っていて、上水道はない。家族で今年中につく水道の話になったとき、祖母は十二年前の日照りを思い出してこう言っていた。

「あの時は本当に大変だったんよ。田んぼへは江の川の水をポンプ二台も使って揚げて。苦勞したんよ。ポンプをもう一台買ってねえ。水揚げするためにお金がかかって、ポンプを買うのにもお金がかかってねえ。」米ができるかできないかは我が家にとって死活問題なのだ。

私は三歳だったから覚えていないのだが、その年は五月の連休頃から雨が降らず、山水に頼って暮らしている私の家では、貯水タンクに水がたまらなくなったそう。飲み水すら出なくなり、周囲の木が枯れ始めたくらいひどい干ばつだったという。そのときの苦勞を祖母はこうも語っていた。

「洗濯は谷の水を使っただけで、洗濯物を谷まで持って行って手で洗ったんよ。そして、家まで持って帰って洗濯機で脱水してね。」と。また、風呂水や飲料水は、八百メートルも下の谷からホースをつなぎにつないで家までやっと引いてきたとのことだ。祖母はそのときにつくづく水の大切さを思い知ったという。

母も「水道のついている家がうらやましかったよ。おじいちゃんが水道をつけたようにみんなに言ったのね。」と教えてくれた。実際に、この日照りの数年前、祖父は地域の人に「みんなで水道をつけないか。」と言っていたということだ。いつの日かこんなことが起こることを予想していたのだろうか。だが、当時の地域の人の反応は「雲をつかむような話をしとる。」というものであったらしい。お金と労力がかかることを心配されたのだろうと思う。結局、水道はつかずに祖父が心

配していたとおり、水不足になってしまったのだ。

祖父はどんな思いで、この十二年前の水不足を受け止めていたのだろうか。今となっては聞くこともできない。その一年後に他界してしまったからだ。だが、「わしの言うとおりで水道をつけとりやあ、こんなことにならんかったのに……。」と首をふりながらつぶやいている祖父の声が聞こえるような気がする。と同時に、この地域の人たちは長い間雨が降らなかったとき、こんなつらい体験をしてきたのだなあとと思う。

あの日照りから時がたち、今から三年ほど前、役場の提案で水道をつけることが決まったと集会から帰った母がうれしそうに教えてくれたことがある。この話を聞き、私は内心、うれしさと同時に寂しさを感じた。なぜなら、便利さ・安定供給という長所はあるが、経費がかかることや、カルキ臭という、短所も出てくると思ったからだ。山から直接引いてきた自然の水のおいしさは上水道から水を得ている人たちにはわからないだろう。何か、大切なものを手放してしまうような気がしてしまうのだ。だが、水道の取り付けが決まった今、私にできることは、その便利さに馴れ合うことなく、水のあり方をしっかりと見据えていくことだと思う。

私たちが生き続ける限り、なくてはならない水。人間だけでなく地球全体の生きとし生けるものを支え続ける命の水。私は、これまで水はタダだと思い、流しっぱなしで使ってきた。だがこれからはそんなことはできなくなるだろう。『水』それは私たちにとって身近なものでありながら長い間苦勞して手に入れたものだ。そのことを私は水道がつくことをきっかけに、心の底から知った。

今年、水道がついたら、蛇口をひねって出た最初の水を祖父の仏壇に供えよう。「おじいちゃん、念願の水が出たよ。」という言葉とともに……。

## 「潤いの水」

島根県 広瀬町立布部中学校  
三年 祖 田 茉沙美

「うわあ。何だこれ。」

私は四月に宿泊体験学習のため関西方面へ行きました。ホテルに着き、のどがかわいた私はいつものように水道水を口に含むと、それは何とも言えない味だったのです。明らかに私がいつも飲んでいる水とは違う味でした。なぜ、こんなにも違いがあるのだろうかと思いましたが、不思議に思いました。

関西地方の水は滋賀県の琵琶湖を水源としてまかなわれているそうです。さすがに日本一の大きさの湖だなぁと思いました。そして湖と言えば私の住んでいる島根県にも宍道湖という湖があります。

この宍道湖のある松江市は「水の都」とよく言われています。それは松江市にはこの宍道湖の他にも、松江市内をめぐる堀川が流れているし、また市を南北に分ける大橋川もあるからです。水の都と言われているのはこのように生活の場の近くに水がたくさんあるからこそです。

ずっと昔には堀川の水を生活水として使い宍道湖でとれるシジミや魚を食べていました。そして堀川へ当然のように生活雑排水を流していました。それでも昔は、自然の浄化作用で大きな問題となるような汚染はなかったようです。それが科学の進歩、産業の大規模化、そして何よりも私達人間のモラルの低下によって堀川はどぶ川のようになってしまったのです。以前私が住んでいた所は堀川の近くでしたが、その汚さと臭いで誰も見向きもしない所となっていたのです。そしてそれは堀川をめぐる遊覧船を始める前まで当たり前のことのように行われていました。

ところが、この遊覧船によって人々の目が堀川に向けられるようになりまし

いる人も増えました。

こうして松江は「水の都・松江」と言われるにふさわしい観光の街となり、人々もたくさん訪れるようになりました。つまり人々の目や意識によって水をめぐる環境は大きく変えることができたのです。

こうした取り組みは他県や他の市町村にも影響を与えました。近くでは米子や出雲でも同じような取り組みがされているそうです。

このように、松江には堀川や宍道湖といった観光のための水があります。ですが、だからといって飲み水が豊富にあるというわけではありません。松江市の飲み水は、現在私の住んでいる広瀬町から運ばれているのです。なぜなら宍道湖はその水の中に塩分を含む汽水湖だからです。

広瀬町は水資源が豊富です。広瀬町内には飯梨川、山佐川、東比田川が流れています。また、塩滝という滝もあり、水資源に恵まれています。飯梨川では昔、川の流れを利用し川上の横田町から鉄を運んだり、山から切り出した材木を運び出したりしたそうです。また他にも、その川の水をたたえる二つのダムもあります。このダムは、飲料水等の生活水としてだけではなくその豊かな水量を利用した発電も行なわれています。また現在の広瀬町では松江のように、観光のための場所として飯梨川の川岸を整備し、使われ始めています。水は心に潤いを与え、また地域も潤います。私はこれだけの豊富な水資源があることに感謝し大切にしていきたいです。

そのために、誰もが水に対する意識と関心を高めてうまく水と調和した生活を送りたいと思います。

## 「味のないトマト」

広島県 近畿大学附属東広島中学校  
二年 中 本 夏 葵

私が小さい頃の遊びといえば、いつも水が身近にあったように思う。公園が、近くなかった私は、川や池や田んぼが遊び場だった。服やくつが、びしょびしょになったり、泥だらけになったりするの、当たり前で、今思えば、母は洗たくが大変だっただろう。泥だらけになった私たちはよく近所のおばさんに、頭から水をかけて洗ってもらったものだ。当然、井戸水で、これが夏は実に冷たい。私たちは「キヤーキヤー。」と逃げ回った。夏だけでない。真冬でさえ冷たい水や氷で遊んで、手を赤くしていた。

私は、ボール遊びをする広場や、遊具で遊んだ経験があまりない。しかし、水遊びについては、かなり詳しいと思っている。今思えば、自然を理解し、自然を守るルールを、ちゃんと身につけてこられたように思う。

井戸水が、夏は冷たく、冬温かいことは体で知っているし、水が張ってある田んぼのあぜを踏んで、こわしてはいけない事も当然のルールだ。また川や池で捕まえて遊んだカエルや、カワニナや、ザリガニは、元の位置にちゃんと戻して帰った。年齢や男女の差に関係なく遊んでいた私は、この山と川と田んぼがある風景が大好きだった。

水は私たちの遊び道具で、当然生活にも欠かせないものである。しかし、その反面とても恐い力を持っている。数年前の集中豪雨の時、わが家に近い川ははらんした。あつという間に、川はあふれて、上流から木や岩が流れてきた。収穫前の周囲の田んぼは、泥水で埋まり、家の中にまで、濁流が流れ込んできた。私はただこわがっていただけだ。

自然の力、特に水の力の前に、時によっては人は無力だと思ってしまう。雨があがって、晴れた時、流された田んぼの、茶色と、残った稲の緑の鮮やかなコントラストが今も脳裏に浮かぶ。近所の大人たちは、被害にあった家の片付けの手伝

いに出かけた。

これ程ひどくなくても、一年に何回かは大雨が降る。川沿いの道が小学校の通学路だった私は、うずをまきながらとても早く流れる川に、すい込まれるんじゃないかと思うくらいの、恐怖を感じていた。いつもは楽しい遊び場に、拒絶されているような気がした。

しかし、水不足の年はもっと、大変だ。貯水池の水が減ってくると、各家でけんかにならないよう、田んぼの水の割り当てをしないといけない。何時から何時までだけ水を引いていいという取り決めだ。その間、祖父は、田んぼにつきつきになる。

そうは言っても、実際、私は今までに水に困ったという経験はない。蛇口をひねれば、当たり前のように水が出てくるからだ。テレビで、アフリカの子が何キロも先に、水くみに毎日通っているのを見た。私たちが水を大切に思うのは、水不足とか、非常事態が起こった時だけだ。そして再び当たり前のように、もとの生活に戻っていく。毎日水を求めて生きている、アフリカの子どもとは、大きな違いがある。

私は水について考えているうちに、祖父が「トマトは水をやり過ぎると、味がなくなる。土が乾いているくらいが甘くておいしいのができる。」と話すの思い出した。水を含め、いろいろなものを当たり前のように、与えられすぎている私は、味のないトマトにならないように、気をつけなければならない。



## 「自然からの「借り物」」

広島県 広島市立早稲田中学校  
一年 原 由 枝

山頂の雪がとけ、流れる川となり、浄水場を通って、私達のくらしに流れてくる。私達は、飲み水だったり、洗濯だったり、あるいはプールだったり、生活の至る所でそれを使用するのだ。しかし私達は、この水の本当の主が「自然」である事を、忘れていたのではないだろうか。普段の生活や、ニュースなどの川の汚染事情を見ていると、いつも考えさせられる。

川の下流では、洗剤の泡や、ペットボトルが浮いているのをよく見かける。というより、ごみや泡の浮いていない川のほうが、少ないだろう。よく、「油スプーン一杯分を魚が住めるようになるまでうすめるには、風呂おけ三〇〇杯分の水が必要」という内容が示された小冊子が、市から配られる。もちろん水は日ごろから大切にしなければならぬ物だが、わざわざ何度も配られるという事はやはり、川の汚れが、そうせざるを得ない程深刻なのだろう。

「水は自然からのおくりものだから、大切にしよう」という言葉を聞いた事はないだろうか。良い言葉であるし、否定する訳ではないが、私は、「おくりもの」という所が少し変だと思った。私が思うに、水は「もらった」物ではない。主である自然から、「借りた」物なのだ。借り物だから、大切に使用しなければならぬし、使い終わった後も、元の形で返さねばならない。決して、汚したまま返して魚たちの命をおびやかすなどということとは、してはならないのだ。ところが今の私達はどうか。水を好き放題使い、油やジュースを川に垂れ流している。水自体は川に戻しているが、これは自然に返しているのではない。自然の中に捨てているのだ。大事な借り物を、汚して、捨てているのだ。許されない事である。いつまでもこのままでは、本当に水がなくなってしまうかもしれない。

水は生き物にとって、なくてはならない物だ。動物は普通、体重の七〇%が水だという。つまり、体重五〇kgの人間なら、その内の三十五kgが水であり、三・

五kg、三・五ℓの水をなくすと命を落とす。水は、本当に大切なのだ。

それに私は、水を飲むのも大好きだ。十人十色という言葉があるように、十味で、水にはそれぞれが違った味がある。水道水・浄水器にかけた水・ミネラルウォーターなど、いろいろな水を飲み比べてみるのもおもしろい。じっくり味わって飲んでみると、微妙に味がちがうのだ。のどの渇きをいやすだけでなく、味を楽しむ飲料としての水の良さを、知ってほしいと思う。

私達は、自然から莫大な量の貴重な水を預かった。私達はその水を使わせてもらう代わりに、元の形で、感謝の気持ちをこめて自然に返さねばならない。そしてこれから私達は、この大きな水を動かしていかねばならないのだ。生き物の代表として、みんなが一番幸せになる使い方をしたい。それが、水を与え続けてくれた自然に私達ができる、唯一の恩返しだと思う。

## 「活きている水・活かされている水」

山口県 周南市立岐陽中学校  
二年 藤村 晃 成

「水田は、自然を映す鏡のようだ。」

祖父の水田を高台から眺めた時、僕は、思わずつぶやいた。一面に広がる水田の水が太陽の光で輝きながら、周囲の山々の緑を映しだしている。静かな朝もやに包まれながら、目を閉じると、水田に流れこむやわらかな水の音が自然をとり囲む生態系にやさしく語りかけているかのように感じる。

「森に太陽が必要であるように水田の水にも太陽の光が射しこんで、水田の生態系が息づいているようだ。」

泥の臭いをする水田のあぜ道を歩いていると、僕は、今まで考えたことがなかった水の側面に気づくことができた。

五月の下旬に僕は、山合いにある祖父の家に行った。綿川の上流の渋川は、毎年夏に泳ぎにくるほど水質も景色も抜群である。僕は、今まで、水の環境といえば、すぐに川や湖を連想していた。ところが、車窓から見える水田の景色が、冬とはあまりにも大きく異なり、あたり一面が水でおおわれているのに気づき、この時期の水田は、水の環境に大きく関係していると確信した。つまり、水のない冬の生態系は、春の訪れと共に大きく変化しながら、水によって確実に生まれ変わっているということだ。そして、冬眠により、あまり活発でなかった生物たちもこの生態系の変化により、うってかわって、活発に行動するようになる。

このことは、植物の種子についてもいえることだ。植物の種子は、水を与えなければ発芽することができない。また、森林も降り続く雨季があつてこそ大きく生長している。

このように考えてみると水には、生態系を支えることだけでなく、生態系を作り、変える原点の働きもあることが分かる。だから、水が汚染され不足していることが、極めて重要な問題になっていると僕は、考えた。

祖父は、「水田の水周りが大切なんだよ。」と僕に教えてくれた。水田に送り込まれる水は常に循環しており、泥と稲とのバランスが大切で、水田に集まる生物たちの食物連鎖も水田の水量と水質に密接に関わっているのだ。

僕は、自分の家の近くを流れる東川の水質調査の時、どんどん上流にさかのぼっていくと、水田の用水路が原流になっていることを思い出した。つまり、水田の水の水質は、都市部の川や湖の環境を大きく左右しているということだ。また、コンクリートで固められた人工の川や貯め池の浄化能力は、極めて悪いことを考えると、僕の見た水田の生態系は、泥や多様な生物で満ちあふれ、優れた浄化能力を維持していることになる。泥の中には、有機物を分解する微生物がおり、プランクトンや水草も多い。つまり、水田の中は、生物でにぎやかなのである。

このように、水田の水を通して考えてみると実に多くの事が学べ、このことに気づいた僕の心には、うれしさがこみ上げてくる。

「水田は、稲を育てる所だけでなく、周囲の環境を育てる所でもあるんだ。」

現在、問題になっている水の環境問題は、日本古来から受け継がれてきた水田を見直すことで、水の重要性を再認識し、問題解決の糸口にもなりうる。特に冬から春に環境が大きくゆれ動き、新しい生命が誕生する春先の環境こそが注目すべき点である。

「梅雨の時期になると水田にはホタルがくるんだよ。」と祖父が言っているのを思い出した。僕は、これから、川などの指標生物だけでなく、水田の水質や生物の生態について調査していきたいと思う。

「水は、ただ存在しているだけではない」と僕は確信している。